

ないのだ。その根本の態度が至る所に露出する。彼の顔を見るや否や走つて行つて、恭くお早うと御挨拶しなければ氣嫌は至つて悪い。或人は彼を『官僚』といふ言葉で呼んでゐる。官僚か何かは知らないが、自分以上の者を知らない。つまり自分が持つてゐる以上の精神を知らない冒瀆者だとは云へる。

彼は職員が縮んでしまひ、避けてゐるのを見て、自分に敬服してゐると思つて居るのかも知れない。が事實は反對だ。かうした校長の下に生活する者の常として、自己擁護をする様になる。そしてあの冷たい、窒息する様な空氣に壓しつけられぬ様にと、自分の心をぎつしりと抱きすくめてゐるのだ。あらゆる芽と成長を止め、冬眠したやうな状態で、靜かに自分を慈しんでゐるのだ。そしてそれ等の人々は自然と周圍から自分で自分を隔離する。暖い心の扉を押し開いて、愉快に子供に接する事が一つの冒險に

思へる様にさへなつて来る。そして大切な教育の仕事は自然とその日暮しなものになり、外面的なものになつて了ふのが至つて無理の無い事だ。

男の教師はそれでも自分に何かの欲求を持ち校長以上の精神に觸れる事を知つてゐるので、その空氣の中にも割に平氣で生活が出来来る。が女教師はそうはいかない。或人は退職する位迄の強い決心を持つ様になる。不合理だと感じて、自分から身を引く人がまだ幸だ。色々な關係からごうしてもそれが出来ずにその日／＼を不安に暮してゐる者はたまらない。主人に叱られる犬の様に、絶えず彼の眼色を覗つて居なければならぬ。極めて簡単な事で彼の前に行つて涙を流して詫びてゐる老女教師等を見た時、自分の眼にも涙が湧いて來てゐた。生活の單調な低能な部類に屬する者は苦しさから遂に彼の奴隸の役を甘んじて受ける事を喜ぶ様になりそして職員等の様子を探る。考へるだけでも顔をしかめる程度の事もやる様になる。

この點に於て生活の無いものはまだ増した。が概してそうはいかない。教育の爲め、子供の爲めなら、勇み立ち、進んでやる心のある人も、不合理な、邪道の前には尻込みする。

結局學校は四離滅裂となる。そして神聖な教育の場所は、いつの間にか他の恐るべきものと變化して了ふのだ。

然し彼にとつてはそんな事はどうでもいゝ事に違ひない。千二百人の生徒が途方にくれてゐやうと、只一二の生徒——有力者の子供——さへうまく操つて行けばそれでいゝのだ。陰では當局者を罵つてゐやうとも、向つては如何にも殊勝な顔をしてゐればそれでいゝのだ。

そして兎に角、彼は事實學校といふものが嚴密な意味で無意味になつてしまはうと、形の上にて、以前として立派な校長なのだ。

彼の生存の意義は、それで充分であるらしい。

「朝湯での話だそうだが、あの校長は大層偉い校長なそうだが、……の事は解らないと見えると云つてゐたそうだ。」

なごし得意相に笑つて話すあたり、如何にも彼だ。誰にこんな恥知らずな事が云ひ得やう。たとへ人が話したのを又話すとしても。

恐らく彼はとても普通の人間では無い。普通の人を感じる恥といふ様な事を感じる機關はどこへか飛んで終つてゐるのだ。同時に人間として最も大切な或部分も。

要するに彼は最早や教育界以外の人の人なのだ。生存の意義——少くとも教育者としてのそれはどうの昔に亡くなつてゐる。彼は今迄の罪惡史でも靜かに考へる時機に立ち至つてゐるのだ、何も無理にこびりつく必要はないそれよりは靜かに念じる事が只の一度でもある様な生活にはいるのが、彼にとつてどれだけいゝか知れない。或は偶然に彼はそうした生活に於て自

分ぶんから退ひけ出だしてゐた「人間」に出で遇あふかも知れない。その時の喜よろこび、それは尊たつといものゝ一つだ。

彼かれとても始はじめから邪道じやどう許あり歩いてゐた者ものではあるまい。或時期あるじきに於おては相當さうたうの仕事しごとをしてゐる筈はずだ。それを無理むりに長ながらへて、自分の意義いぎのある仕事しごとをしたのを帳消ちやうしょうしにする事は下くだらない事だ。

何なにはともあれ意地いぢにも。といふ彼かれ一流りゆうな曲まがつた、冒瀆ぼうとく者の持もつ神經しんけいがある。それが或あるは彼かれをどうく動うごきのとれぬ所ところへ迄無意識むいしやくの中に導みちびいて行くであらう事ことと自分じぶんは心配しんぱいする。

改かめて自分じぶんの進すすむべき生涯しやうがいにはいる。それがどれだけ深い意義いぎがある事ことか能わからない。恐おそらく自分じぶんもこの教育けいよくの社會しゃかいに絶望ぜつぼうし切きつた時はひつかかりを感じる事ことなしに新あらたしい生涯しやうがいに這入はいる事ことだらう。

自分じぶんは彼の爲ために祈いのる。再び彼かれから出でてうろづいてゐる筈はずの「人間」に

逢あふ事ことの出来できる生活せいかつにはいる日の速すみかである事ことを。彼かれはそこに始はじめて新あらたしい生存せいぞんの意義いぎを發見はつけんしなければならぬ。しみぐと人生じんせいを味あじふ事が出来できるのだ。

かう書いて來きて自分じぶんが非常ひじょうに淋さびしくなつて來た。何故なぜ自分じぶんがこんなに憤いきまり荒あまなければならぬのだらう。自分じぶんは決して校長かうちやうの中に住すんでゐる者ものではない。従したがつて何も拘泥かうどせず自分じぶんを慈いっししんで少し宛進えんしんんで行ゆけばいゝでは無ないか。

然しかし、自分じぶんはそれが出来できない、若わかいせいもあるかも知れない。何も感じぬ様やうにして静しづかにして暮くしてゐる老人らうじんの心こころを自分じぶんは羨うらやましくなる。あらゆるものから卒業そつげふした様な平安へいあんな静しづけさが羨うらやましい。

自分じぶんの心こころには何なんとひつかかりが多い事ことだらう。自分じぶんはどうしてもあのグ

ループから自分を取り離して考へて行けないのだ。どうしても自分と子供との深い密接な世界を思ふ。必然に學校が出て来る。そして統督者である學校長が考へ出される。従つて自分は云はなければならぬ氣持ちになつて来るのだ。それが皆間接でもあり、又直接でもある子供達の爲めになるのだ。自分は時々夢にも見る。色々な教へ子の顔を。それが自分を平安な國へ連れて行つて眠らして呉れる。

子供達の事を考へれば自分は云はざるを得ない。こんな無駄書をした所で何にもならないのだが決して小さな問題では無いのだから。がそれが直きに自分の心に反響して來て情ない氣を起させる。

自分は迷ふ。

只黙つて彼がむきかへる時を待てばいゝのか。いやそれも出來ない氣がする。

自分が去ればいゝのか。いや自分には與へられた子供がある。まだ何もしてゐないといふ氣がする。

校長が氣まぐれに云ふ事を後生大切に守ればいゝのか。いやそれは自分の良心が許さない。信念が許さない。校長以上の事を目にかけてゐるからだ。自分はどこ迄も据り込んで終ふ積りだ。

×月×日。

『今子供等の乗つてゐる舟は難破しかけてゐる。さあ皆で一所に救つてやつて下さい。』

と大聲をあげて校長諸氏並に教育者を呼ぶ様な氣持ちになつてゐる。

實際子供達は難破しかけてゐるのが多いでは無いか。そして校長諸氏或は教育者がわりに平氣でそれを見つめて居るでは無いか。自分の眼界がせまいせいかも知れないを。

尤も信念の上に立つて勇ましく子供の爲めにやり出した所はかなりあるらしい。然し大部分はまだそこ迄行かずに居るでは無いか。

先づ何より自分は校長諸氏に望まなければならぬ。確乎たる信念を持つて、子供の爲めに勇ましくやり出して下さいと。

それには何より教師がうまく彼等の元に生かされなければならない。今どこにも彼處にも生かされずに苦しんでゐる教師がごろ／＼してゐる教育が振ふ譯はない。たゞこゝだけだと、云ひ得ない事もない。教師を甘く生かすかどうかといふ事が非常に大切な事だ。

教育者が他の社會に逃げ出して行くのが多いのは、決して俸給等の爲め許りでは無いといふ事を考へる必要がある。自分が安んじて幸福に生活する事が出来ぬ所を去つて新しい生活の場所を探し出そうといふのは決して無理では無い。そゝいふ人に向つて、人間は此の頃輕薄になつた。精神を

忘れて物質にだけ走る等といふ聲がよく聞える。然しそれは早計だ。

教育者は兎に角この職業に就くからには誰も始めから他の職に移る準備としてやり出す者は無い。出来る事なら終生この美しい事業の爲めに盡そうと思ふのだ。誰も好んで自分の不案内な他の職業を望む者は無い。薄給であるから逃げ出すのか。が單純にそうは云へない。何よりの大きな原因が、面白くない。自分が望んでゐた様な事が一つも出来ないし、自分は死骸の様にならなければならないといふのが嫌になるのだ。つまり自分が幸福に生きる事が出来ない所に不満があるのだ。誰しもこの精神の事に對して未練があるのだ。が耐えられなくなるのだ。人は決して物質に簡單に走れる者では無い。況して教育の仕事に相當の自信を持ってやつて居る者が決して無條件で物質に動かされるものではない。『自分を確かにこゝで生かす事が出来る』と信じた所からは、人は容易に動き出さない。然しとても

小學教師の手記

自分を生かして行けそうも無いと思ふと物質の牽引力が強く働らき出すのだ。

現今教師がよく遁げ出す理由の一つは明らかに茲に在る。

某校の様な學校にゐる教師は誰一人として教職に甘んじてゐる者は無い怖ろしい事には教職を呪ひ侮辱しさへもしてゐる。茲に至らしめたのは誰でも無い校長なのだ。

此の校長こそ自分がともに教育の仕事に安心して預る事が出来る校長だと思ふ人に遇つた人は萬難を排してその職に殉ずる。

「自分がこゝで生きる事が出来る。」といふ強みは人を最も幸福にして強くする。

校長は先づ信念のある人でなければならぬ。それから正しい人間で無ければならない。人間味の亡くなつた者は、他のそれも涸渇させる様にな

る、そしてこれが多分に無い者は人の心を暖める事が出来ない。

人の心を暖める。それは何でも無い様な事であり乍ら、非常に重要な事である。太陽の光りが萬物に生命を具與する様に、人の心の暖かさは他から美しい、力の漲つた者を探し出す。

校長の人間味から發する暖かさが、常に職員のことを暖めてゐる時、そこにこそ非常に有意義な物が芽を出す。教師は皆元氣に自分の力の限り働くのだ。教師のそのうるほいは直接に子供に響く。そして又そこに子供を力づけ、光明を與へて、その世界を開いてやる。

子供は未知の者の前にはぎつしりを自分の心を閉ぢ込めて見せない。が自分等の上に、暖い心が掩ひ被さつてゐるのを知つた時、彼等は皆我もくんと残りなく戸を開いて了ふ。

若し人の心が暖く自分等を包んでゐる幸福さに、安じて居る子供がある

とすれば、彼等は雪に閉ぢ込められた若芽の様に、ふるへながら或呪を抱いてゐなければならぬのだ。

人の心がさらけ出された時、そこに色々なものを感ずる事が出来、そして正しい成長がある。教師の暖い心の前にひろげられた子供等の踊つてゐる心それがあらゆる光を吸ひながら育つて行くのだ。

繼母にいちめられぬいて育つた子供。それから兩親がなくて苦しみながら育つた子供。

彼等は雪に閉ぢ込められ盡した若芽の嘆きを語つてゐる。人の心の暖かさを知る事が出来ずに育つた子供の眼を見れば、彼等の心は如何に陰慘になつてゐる事を知る事が出来る。

多くの犯罪者、それはそうした種類の生活の變形だ。

冷く閉ぢ込められて育つた者は、恐れる物を知らない。これが不明な言

葉だとすれば、自分を献げる者を持たない。又別に云へば神を知らない。神を知る。それが子供等の生活に全然没交渉では決してない。彼等は自分で神といふ事を意識しては居ない。然し彼等の舉動を仔細に観察して見ると、彼等は自分以上の大きな力に委せ切つてゐる様な瞬間を認めるであらう。それは親に對しての安心、教師に對して安心を飛び越した感じを與へるものだ。これは人の暖かな心に抱かれて育つた子供の事であるが、反對に育つた子供は決してかうした瞬間を持たない。彼等の神経は自分を虐げる者だけを知つてゐるのだ。そして怖れてゐるのだ。だから絶えず奇異な眼を見張つてびく／＼した様子をしてゐるでは無いか。

教師がたえず自分で心を閉ぢ込め、他を警戒し、荒んでゐるとすれば、子供等の心は冷く固るだけだ。先の雪にこぢこめられた芽の様にかうした教師の心境は、子供等を暗い方へ、陰慘な方へと向けて行く他はない。

絶えず暖いうるほふた心になつてゐる事の出来る教師、それは暖かく自分等を取り捲いてゐる校長の心を感じる幸福を持つた者なのだ。或人は教師の心が、この様に簡単に支配されてたまるものかといふかも知れない。然しそれは理屈だけだ。事實に於て、それが明らかにそして至る所に現れてゐるでは無いか。学校中がいつでも太陽が照つてゐる様な幸福。それはあらゆるものを育てる所なのだ。

暖い心。それは或見方をすれば誠意とも云へる。少くとも暖い心の中にはこの誠意が含まれてゐる。

誠。それは尊い者だ。校長が仕事に對してこの誠がなくつては何の役にも立たない。自分の感情を超えてこの誠が踊り出す所に、意義のある仕事が進展する。單なる私情を持つて教師を取扱ふ校長のある学校には正しいものが展げていきはしない。教師の温勞を定めるに、自分にお辭儀する事

の多寡や、おべつかに依つて定める等の學校は、本當の意味で學校が減びて行くだけだ。

校長は意見と、確信とを持つ必要がある。校長の意見と教師の意見とで織り込まれて行くので無ければならない。時々意見の交換を大膽にし合つて一致點を求め——それが中心に向つてゐる筈であるから決して一致點を求め得ぬ筈がない——でお互に協力してやつて行くだけの度量、別の言葉で云へば誠意がなければならぬ。感情がはいり込んで終ふ爲め、遂迷ひ込んで了ふ事があるのだが。

それから校長は教師の特質を知る事と、それを充分生かす誠とが必要だ。自分の持つてゐる確信を踏みにぢられ、抑へつけられ、無視された所に、教師は不満を感じ出す。教師の誠意を生かす事が極めて大切だ。

教師は安んじてその校長の元に仕事をし、お互に力づけ合ひ勵まし合つ

て行く所に美しい成果が生ずる。生きる事の喜び。それは何よりの幸福である。

かうした所から決して遁走者が出ない。

そして子供達は楽しく幸福にその學校で育つ。彼等は難破船上の者ではない。

×月×日。

突然校長から轉任の辭令をつきつけられた。そして校長はその理由をかう説明した。

「君とは意見が異ふらしいから、外の學校へ行つて貰ふ事にした。それは君の幸福の爲めにもだ。」

自分は繰り返して理由を聞いたがそれ以上に無いと言明した。自分は「先生は私の幸福がどういふ所にあるかわかりですか」と聞いた。校長は何

とか云つて誤魔化した。勿論彼にそんな事が解る筈がない。自己の精神生活が確立してゐない者に他のものゝ幸福など解る筈があり得ない。幸福といふ事を云つたのさへ出過ぎてゐる。が彼にはそれ以上の事が何も云へなかつたのだらう。色々考へた末一寸辯解のたちそうな幸福といふ言葉を選び出したのだらう。しつかりした生活をして、深く考へてゐる人からこの語を聞くなら極めて自然に聞えるかも知れない。然し校長から聞かされる滑稽になり、半ば腹が立つ。

自分はさすがに辭令を突きつけられた時まごついた。然し向ふが彼であるが故に割に落付いてゐる事も一方出来たのだ。彼はこの位の事はやり兼ねない男である。そして又人の運命などいふ事は、てんで問題にしない人であるからだ。それに自分が云ふ事が彼にはあまり縁の遠い事が多過ぎたのと、向ふからへんに邪推し出して邪魔物扱にしてゐる事を知つてゐた

からだ。が、まさか不意にやらうとは思つてゐなかつた。これも自分を本位にした考への誤りだつたのだ。

ずつと前に、何とかいふ小さな新聞に校長に關した記事が出た事がある。自分は、それを子供が學校に持つて來たので知つてゐる。彼が、某女教員と醜關係がある事を摘發した記事であつた。又不敬事件なども加へてあつた。自分は此の時知らなかつた事を知つてびつくりした。事實ではないのを誰か中傷したのかなとも思つた。然しありそうな事にも見へた。父兄はそれを知つて騒ぎ出した。大抵の者はそれを知つてゐるらしかつた。現在二人連れでどつかへ行くのを見た父兄もあるとかいふ事だつた。

自分は信せざるを得なかつた。それから自分の耳に尙色々な事が傳はつて來た。父兄の一人は『校長が某に腹を借して呉れ。と云つたといふのは本當ですか。』などと聞いた。然し勿論自分の知らない事だつた。自分はあ

されるよりなかつた。殊にこの言葉を聞いた時、自分はあつげにとられてしまつた。そしてまさかと思つた。いくら彼でもそれ迄は云ふまいと思つた。が一方彼が人の運命などを考への中に入れぬ人間である以上、處女に向つてそんな事を云ひ兼ねない者の様にも見へた。何といふ恥知すだらうと自分は思つた。結婚でもするといふなら譯が解る。然し單に子供が欲しい爲めにそんな事を云ふといふ事はあまりに虫がよすぎ、人を侮辱し過ぎてゐる。何しろ一方は未婚の女ではないが。それを自分の從屬物の様に非常な簡單さで取扱ふといふ事は寧ろ恐ろしい事だ。一方の女だけいゝ迷惑だ。而かも彼は立派な妻帯者では無いか。子供が無い淋しさ、それは解る。さればといつてそんな事を云ふ事は恥を知り、自分を知り、同時に他の運命を考へる者には出來ぬ事だ。恐らくこの世の中に、かうした事を云ひ得るのは彼だけだらう。

自分は彼の爲めに希ふ。それが無根の事であつてくれる様にど。
それは兎に角として、新聞への投書者として自分を疑つてゐるといふ事を聞ひた。自分はへんな氣がした。何故自分が赴任前に起つたそんな種類の事を知つてゐると思つたのか自分には解らない。彼が一流の神經はそう判断したらしい。誰かに「知らせる人があれば、幾等過去の事でも知る事が出来る」と云つたさうだ。正しくさうに違ひない。過去の事だからといつて知らぬのが本當だとは云へぬかも知れない。殊に甚い事は早く傳り易いものだから。然しそれが自分の場合にもあてはまるとは云へない。事實自分はそんな事はその新聞を見る迄知らなかつたのだ。が彼の頭にはどうしたものかやつぱり自分がやつた事だと斷定されてゐたらしい。自分は色々な人からその真相を聞かれた。然し自分は餘り多くは云はなかつた。何故なら善いにしろ悪いにしろ校長なのだから。それから又事實も知らな

つたのだ。

その後色々な投書が區役所や市役所へ舞ひ込んださうだ。それ等も自分のやつた事だと思つてゐるらしい。それも後から解つたのだが。

不意轉任、それはかうした事が背景をなしてゐる事は確實だ。が正面の理由としては意見が違ふと云つたのだ。

自分は不幸にして彼の意見なるものを聞いた事がない。大抵の人は底からその思想の中心を思ふ事が出来るものだ。が彼はその例外だ。自分の神經は決して人並はづれて鈍感では無い筈だ。が自分は彼の意見なるものを知る事が出来ない。念の爲め「教務手帳」を見ても、又職員會の記録を見ても解らない。若し無理にその意見なるものを探し出したならば『自己主義者』が所々に顔を出してゐるだけだ。それ以上何もまどまつた者を探し出す事が出来ない。なる程色々な施設からおせばわからぬ事がないとも

云へやう。然しそれは彼の本心からの意見では無いのだ。やつぱりエゴイストが考へ出した外面的なものに他ならない。中心の要求から出た者は一つもない。皆空虚なものであると自分は断言する。意見といふものは少くも教育者であり、而かも校長である以上教育上何等かの確信が無ければならぬ筈だ。そこから出て来るものなら、自分は教育者の意見として是認する。然し彼にはこうした背景が全然無い。言葉は常に空虚だ。自分が力んで云つてゐる事でも、他の人から聞くと虚言の様にしか思はれない。意見だなどとはとても思へない。

それでも自分も彼からその意見なるものを探し出さなければならぬのか。自分は迷はざるを得ない。自分は仕方なしにかういふより無い。『如何に自分を偉く見せ、如何に學校をよく見せやう。その爲めには此何にして教師を壓伏させやうか。如何にして生徒に偉く見せやうか。又參觀

人及び學事關係者によく見せやうかといふ事が貴方の意見とでも云ふべきものですか。』

自分は情なくなる。一校の校長が無一物で而かも自分の爲めに學校の存在を認めるやうな彼がこの進みかけてゐる教育界に居るといふ事を思ふと悲しくさへなる。子供達は一の明かな犠牲者だ。

その他に彼は意見があるといふだらう。『否自分は子供の爲めを考へてゐるんだ。』と恥知らずにも云ふだらう。然し悲しい事にそれは何一つ實施されてゐない。言葉の空虚な一時的な内生活の要求のないものは、常に他に對して没交渉だ。なる程階子段の上り下りの足音が高くていけないから靜かにしなければならぬと云はれると、正直に當分それをやらざるを得ないだらう。然し教師はこんな事を子供に強ひ乍ら、『何故こんな事をしなければならぬのか。もつと〜大切な事は何もないのか。否々これ以上の事だ

らけだ。こんな事はほんの後の問題だ。」と思ひ乍らそれをやつてゐる。だから多くの場合それが實行されずに終ふ。御氣嫌伺ひを事とする他に何もない女教師等が時間を潰してやる他本氣になる者が一人も無い。實際誰が考へてもこれ以上不必要な事はない。少くとも子供といふ事を頭に入れて考へる人には、かうした事が解らないに決まつてゐる。

それなら何故子供にこんな事を強いるのか。それは明白だ。他人に見せるに非常に必要のある事だからだ。整つてゐるといふ事を見せる爲めだ。然し生憎今の教育界は見る人の眼が進んでゐる。そんな事で誤魔化される者が少い。もつと大切な事をねらつてゐる。整つたといふ感じ。それはこんな外面的な事でなく、教師が如何に活動してゐるか。如何に皆元氣で確信を持つてやつてゐるか。それから又校長が如何なる意見を持つてゐるかで感じる。たとへ個人々々によつて行き方が違ふにしろ、校長が或確實な

信念を持つてそれが徹底してゐるのであつたら、教師の授業の上にそれが現はれる。それは決して劃一と云ふのでは無い。教師の熱、態度、及び生徒のそれで明白に或統一、整つた感じを受けるのだ。こんな階子段程度の事で感心するのは、全く教育に關係のない、然かも教育に眼の無い者だけだ。こんなにして人を誤魔化すには、世の中が少し進み過ぎてゐる。

兎に角校長はこんな事はよく云ふ。然し如何に導くべきか。時代の子として如何に教育すればいいか。この土地の子を善導するには如何にすればいいか。などの種類の事は一度も本氣になつて話すのを聞いた事が無い。『子供の爲めに』といふ事は苟も校長ともあるべき者は申譯にも云はなければならぬ事なのだからそれだけで本當にそう思つてゐるとは思へない事だ。その實行方面でだけそれが價値づけられる譯だ。

が彼のやる事は常にそれとは反對だ。常にそれを裏切つてゐる。『その實

行は各自に一任する。』とでも云ふかも知れない。云ひそうな事だ。然し本當に痛切に感じ確信を持つてゐる者はたとへそういつたにしろ、絶えずそれが如何に行はれてゐるかど氣をつける。が彼はそんな事は無い。彼は子供の爲めに教育してゐるのではない。少くも教育者の資格が無いと云はれても強辯が出来ない。

彼は子供の中から『世話係』といふ者を選んだ。それは六年の者で、順番にやる事なのだ。そして記録を作つてゐる。この一見學校などに珍らしい名前、否役を持つた子供は、一體何をやるか。それは、看護の補助だ。こんな事はもつと早くやつてもいい事だつたのだ。然し方法がいけない。記録に何を戴せるかと云ふと、子供の中で甚い事をした者の行爲と名前とを書いておくのだ。それが後に教師か或は校長が生徒を叱る材料になる。若し必要があれば書いても悪くはあるまい。がそれ以上の事が忘れられて

ゐる。善い事をした者は一向關係が無い者になつてゐるからだ。

このやり方は實に校長式だ。これだけでも彼のへんな官僚的な心が思はれる。悪い方面だけを見、善い方面は一向に生かす事を知らない彼にとつては當然なやり方だ。實に彼とびつたり合つてゐる。教師に接するにもこの心が根本になるのだ。悪い事は指發し、善い方面は全然萎縮させて終ふ。かうした役に子供を使ふ意義は、他の善行をすゝめるといふ事にある。その爲めにはその善行をした子供を譽めなければならぬ場合が多い。そして全體の心をその方面に向けて行くのならいい。然し消極的に多くの子供の前で、悪い事を誤つてした者の名前を指摘して恥をかかせ、萎縮させるといふ事は教育者がとるべき教の道では無い。この事を決定する前に教員には何の話もなく、命令的にいはれたので、誰も意見を云へなかつたのだ。彼がこんな事をやり出したのは、米國へ行つてボキススカウトを見て來

た爲めかも知れないと思ふ。互に協力し助け合つて行くといふ事は兎に角解つたとしても、それがこの様なものとなつて現れる時に滑稽になり悲惨になる。一方は生かされてゐる者が、一方では殺されて利用されてゐる。彼は選ばれて米國へ行つて何を見て来たか。それは彼にも解るまい。解つてゐるものはナイヤガラの瀧であり、宏大な建築であり、アスファルトで固めた路であり、廣い廊下を蓄音機の行進曲に合して進行する子供である。そしてお土産は何かと云へば、繪ハガキ屋に行けばさらに在る米國の風景である。それは正しく友人が前に云つた通りである。一寸はそれでもごまかせる。然し精神の上のお土産は何一つない。「少しは官僚臭がとれて来るだらう」といつて期待してゐた職員は、その期待の外れた事を悲しむより他ない状態だ。兎に角同行の一人が秀才育教をやり出した。又或人は新しい考への上に活動し出した。然し彼は友人が前に云つた様に、某雜

誌で報告してゐるつまらなさ以上に依然としてゐる。

或父兄はかう云ふ。

「私はナイヤガラの瀑布の繪はがきを頂きましたが、そんな事はさうでもないから、子供の爲めになる新しい教育に關しての意見でもあればよかつたどつくづく思つてゐます。」

自分の子供の爲めに幸を願つてゐる親として實に當然な言葉だ。然し悲しい哉、いくら磨いても、人形はやつぱり人形だ。それ以上の事は出来ない。かくて彼はやつぱり彼なのだ。

少し他の事を書きすぎた。又元へ戻つて自分が轉任になつた理由を書く。彼が投書類に關して自分を疑つた次に、もう二つの事がある。それは、或感想を教室で書いた事に原因する。

綴方の時間だつた。自分は例の様に子供等に綴方を書かせる前に一應話

して、それから子供等が書き始めたのを見て、自分が感想を書き出したのだつた。子供達はわき目もふらず一生懸命になつてゐる。自分も頭をひねり乍ら筆を動かしてゐた。

自分の主義として綴方を子供が書いてゐる間は一切妨害になる様な事はしない。机の間をがたり〜と歩いて誤つた字を指摘したり大きな聲で話す事などが決して無い様にしてゐる。一寸でも熱心になつて書いてゐる心を動かす事はしないつもりなのだ。折角考へて書いてゐるのを中断させるのは、他人の神経を知らない者だけが出来る事だ。そしてこの學課は他の學課の様に断片的なものではない。構想をし、それから記述する。その間少しも他の事を氣にする餘裕がない。が往々にして机列の間をがたつかせて歩いて叱言を云ふ者がある。それは決してやつていけない事だ。他人の畑を無断で、無遠慮に踏み荒らす者だ。自分にはとてもそれが出来ない。子

供の世界を主んじやうとする自分には出来ない事だ。従つて自分はその時間ちつとして子供等が書き終へるのを待つてゐる。批評は創作する時間になしに、他の時間でやる。或は教場で、子供に話して知らせ、或は職員室で文を批評する。

自分の級の綴方が決して劣つてゐるとは自分は思はない。成績を見れば解る。それは自分が無暗に子供の發表に干渉せず、自由にしてゐるからだ。だが彼は教室で何か書いてゐるといふ事が氣にくはなかつた。殊に自分であるが故に『教室で授業時間中に色々なものを書いていけない。』と或人に云つたとか云ふ。自分には直接には云はなかつた。自分に云へば云ふ事があるのだが、自分に云はせる事を避けてゐるのだ。自分はもう少し感情ではなく公平に物を云つて欲しいと思ふ。自分が教室で子供等と一緒に書いたのが何故いけないのだ。そんな事なしに如何なる事が授業中に

行はれてゐるか色眼鏡で、なしに見、判断するがよい。子供等は自分が顔をしかめたり頭をおさへたりしながら夢中になつて書いてゐる事が、子供等の綴方の成績に如何なる影響を及ぼすかを一寸でも考へて見るがよい。それから自分の綴方の成績を見てからいふ事があつたら云ふがよい。兎に角この事が一つには原因をなしてゐる。そして口實を與へてゐるといふ事はかなり確實た。

彼は自分が感想を書いてゐるのを見てから慌てゝ自分の處へやつて来た。自分は一向かくす必要が無かつた。「何です。」と聞いたから「感想です。」と答へた。子供等は一樣に自分達の方を見た。彼等の考へが無惨にも中斷されたのだ。然し彼はそんな事は一向感じないらしかつた。そして黙つて自分の書いてゐる原稿を讀んでゐた。自分はあまり無神経なやり方なので腹が立つたが我慢して黙つてゐた。そしてこの原稿を貸してくれと云つ

た。その前に「これを何かに投書するのですか。」と聞いた投書といふ事が感情を害したが、「いえ、そんな事をしません。」と答へた。

彼は一體投書といふ事を何んだと考へてゐるだらうと思ふと、滑稽にもなつた。自分は原稿をむしろ喜んで貸した。それは讀んで貰ひたくさへあつたから。

その原稿といふのは他でも無い。女の教師が子供を體操の時間に叱つて得意がつてゐる事を書いたものだ。自分は、それを或雑誌と約束があつたので感想として書いたのだつた。意見の無い彼に、意見の斷片の様なものを見たのは確かに驚異だつたらう。そして全然職員の見解といふものを用ひやうとしない言論壓迫主義者の彼にとつては一大事件だつたかも知れない。然しその感想には教師の名前も書いてゐなかつたし、勿論學校の名等を書く様な事はしてなかつた。許りでなく、自分の名前も變じてゐたのだ。

若しも誰かに迷惑でもかゝる様な事がすまないと思つたから。彼にとつては他の感想、言論は禁物だ。自分が何もない事を露骨に知らなければならぬから。彼が本を讀まないのもそんな關係かとも思ふ。まさかそんな事も無いとは思ふが。

自分は今度は轉任の理由を正面から考へなければならぬ。

意見が違ふから。といふのは一體何の事か自分には解らない。それは個人々々に依つて違ふだらう。然し自分は前にも書いた通り、彼の教育上の意見なるものを知らない。それから校長とても自分の意見を正面から聞いた事がない筈だ。云ひたい事を抑へられなければならぬ自分にはその自由さが全く殺かれてゐたのだから。勿論断片的に自分が話し、行ふ事から推量は出来たらう。彼の位あいまいでは無かつたから多少は、たとへそれが正解でないにしろ解つたかも知れない。感想などを讀んであれが嘘だ。つ

まりあれとは自分の考へが違ふ。とてもいふのかも知れない。然しあの短い感想を而かも彼の讀んだのはその小部分なのだ。——を何と見た事だらう。誰でも云ふ、そして實に當然な物では無いか。それにさへも彼は驚いた事であらうか。それとも又あの女教師は、父兄間で問題になつてゐる、彼の對照物であつたが爲めであらうか。自分には呑込めない。

何しろ意見が全然同一だといふ事はあんまり例の無い事だ。教育に關しての意見にしろ根本に於て繋つてはゐるのだが皆別々なのが當然だ。苟も個性のある人間である以上、そうあるのがあたり前だ、自分達は子供の爲めにと云ふ事で一致してゐる筈だ。その根本が相違してゐない以上、生かし方には色々あつてもそれは自由でなければならぬ。殊に彼が意見も確信もなく、教師が何をやつていゝのか、どうすればいゝのか判然しなれば勢自分の思ふ通りをどしどしやる他がない。でなければ尻込みをして子

供を傍観してゐるより他ないのだ。

自分が子供に對しての考へが誤つてゐるだらうか。誤つてゐるなら自分はいつでも訂正する。そして少しでもいい方面へ進んで行きたい。教育者である以上、その職にゐる以上子供の爲めにならぬ、教育の本旨に背いた事は恥であり、又一種の罪惡だ。それを改めるのに何の躊躇がいらう。自分が子供の世界が少しでも展げる様になら出来るだけの努力をしたい。教育の進歩したものであつたら、自分は喜んでその意見を述べる。教育の進歩とは子供の生命の進展である。自分は何を好んで、自分の若い洗煉されない考へを固守しやう。

が自分の考へが果して誤つてゐるだらうか。そうだとすれば彼はそれを指摘してくれるのが當然だ。少くもともに教育の爲めに身を捧げやうとする希求のある者として普通の事だ。そして互に勵み合ひ、匡し合つて。子

供の爲めに進まなければならぬ筈だ。

考へが違つてゐる。それだけで一體自分はどうすればいいのだ。違つてゐたら改めるやうにしてくれるといふのだが。少くも職員を督する校長であるならばそれが當然な事だ。

自分は校長の意見なるものを知らない以上自分の考へをどうすればいいのかわからない。

それに意見が違つてゐるとすれば何れか正しい筈だ。その正しい方に従ふのがいい事だ。又場合に依つてはその一致點も見出せる。そして互に助け合つて、非常に重大な責任のある仕事を、少しでも完全に遂行しやうとしなければならぬ筈だ。

彼が若し本當に子供の爲めに教育してゐる者であつたら、簡単に意見が違ふとか云つて不意轉任などさせられる性質のものではない。或は彼の方

が間違つてゐるのも知らない。その爲めに子供を過る事が無いとも云へない。従つて本當に子供の事を考へる者であつたならば、匡し合はなければならぬ筈だ。それをかうした暴舉とも云ふべき事をする彼は、明らかに立派なエゴイストであり、子供の爲めの教育者でないと斷言出来る。

尙ほ一つ自分は不満な事がある。

それは彼は彼は教室毎に呼鈴を据へつけやうと考へてゐる事だ。それは誰に相談したのでも無い。自分一個の考へからだ。その必要がどこにあるのか自分にははつきり判らない。然し恐らく彼の望んでゐる事は、ベル一つ押して授業時間中に急に職員を自分の所へ呼びよせる痛快さを考へてゐるのだ。自分は敢て授業時間といふ。授業時間で無ければ教室に教師がゐるに決まつてゐるからだ。その授業時間中、職員を急に職員室へ集める必要が何時あるのだ。そんな緊急な事が今日迄にいつあつたのだ。若しあると

すればそれは自分の手ぬかりから起る事だ。たゞそれだけだ。學校にそんな急な事は何も必要のない事だ。或人はそれを聞いてから云つた。

「校長は何も大して考へてぢやないに決まつてゐるんだ。只職員をベル一つで動かし、慌てさせて見たいんだ。そして一方にはそんな事で校長の偉さを示してやりたいんだ。」

事實それ以外に何もあり得ない。教授上にも利用するといふか。若しそんな事をいふとすれば誰でも笑はずには居られまい。教授用の標本で澤山だ。若し本當に見せたいならば職員室と小使室にあるではないか。それで充分だ。

これはどこから來た影響か。それは米國だ。彼の感心する事はその極度から一步も出てゐない。それは金のあり餘る國で、教授用、殊に必要な理科器械も購入の出來ずにある學校で眞似る性質のものでは無い。

それは他の學校にもある事を知つてゐる。が、その多くは父兄の意志から出た寄附ではないか。

彼は又このベルを誰か特別に參觀人が来た時に、職員に警戒する爲めに用ひやうとするかも知れない。或時かういふ事を聞いた事がある。何でも市の視察か誰かの時だ。

『あゝ云ふ人が来たなら主席の人か誰かが皆にしらしてくれる事だらうと思つてゐたが。』

何といふ云ひ方だ。そして精神だ。皆責任を他に轉嫁させ、自分は何も手を下す事などする位置の者でないといふ調子である。これが彼にとつて當然の事と見える。學校の職員を監督するのは一體誰なのだ。

それから參觀人が来たなら、遽かに飾れといふ事はあまりにその精神は下劣だ。自分をおして他を考へるからかういふ事を云はずに居られないのだ。

さてベルの用はそれ以外、どこにあるのか。自分には解らなくなる。授業中職員を無暗に騒がせ防害するといふ事は許し難い事だ。職員を警戒したりなどするなら、そんな物が無い方が遙かにましだ。

一體電線はどれだけかゝるのかを一寸でも考へて見た事があるだらうか。尙教室にひく電線の長さや価格とを。それは恐ろしい多額に上る。友人が計算したのを聞いた事がある。

こんな無謀な、そして又不必要なものゝ事を考へる代りにもつと子供に直接な事を考へてはどうだらう。用があつたら、五人も六人も居る小使でも又給仕でも充分過ぎる。

彼は此頃又機運に押し立てられて、遅ればせながら理科の兒童實驗を計畫し初めた。それ迄は兎に角も賛成だ。然し實驗室を職員室にしたらいふ事の爲めに頓坐してしまつたのは何といふ事だ。それは、何でも無い簡

單な事なのだが。頼まれた二人の教師は計畫して、是非職員室全體でなければ駄目だと云つた。彼は自分がゐる所を残して貰ひたいといふ。それではとても充分に廣さがとれず、危険千萬だと一方では云ふ。そして職員室を實驗室にすれば、彼は今他の學校に貸してゐる室にはいらなければならぬ事になる。彼はそれがいやなのだ。少し明い、陰の小さい室にはいるのは權威に關するでも思つたのだらう。又他の學校の職員を移す——そうすると各受持ちの教室にでもゐて貰ふ事になる——事がすまないでも云ふのか。現在實驗室が出来れば、本校の職員も皆教室に移らなければならぬではないか。それと思へば他の職員も不満なく移つてくれる筈だが、彼には本當に子供の事を考へる前に自分の事が考へられるのだ。子供の生活を目的とする學校でないのだから。

それから一つ、職員が教室に移ると、教師同志より集つて何か悪い事

でも、企てはしないかといふ事をかなり心配してゐるのだ。放課後でも、二二三の職員が教室で話してゐるとすぐにそれを懸念し、それを分離させる事から考へて見ても明かな事だ。

何しろ誠意があれば、本氣になつて子供の事を考へ、自分の不自由を忍ぶつもりなら出来る事が、ついひつかうつて立ち消えになる。折角やらうと思つて意氣込んでゐる教師も氣抜けがしてしまふのだ。あゝエゴイストよと云はずに居られない。

それはそうとして不意轉任をさせた彼の心持が解らない。といふよりはあまりに普通で無い。

自分は校長の庸人では無い筈だ。それを不意轉任をさせる慘酷な心持ちは、教育者である者として異例な者に相違ない。自分が破廉恥な行爲でもした爲めだとかで、轉職なり特別に不意轉任にすることもいふなら解る。

然し自分にはそんな事が無い。自分の信じる教育の道を驀に進んだ迄の事だ。自分の何が一體この刑に相當するのだ。

それに『君の幸福の爲めにも』なら猶更だ。茲に至つて何を云つてゐるのか一向見當がつかなくなる。幸福の爲めに不意打ちを食はせる慈悲心のある主人は何處の國にもあるまい。

意見が違ふ爲め、それから自分の幸福の爲めに不意轉任、而かも遠く離れた不便な場所へ轉任させるといふのは一種の島流しだ。泪の無い、人の運命を傷つける事を何とも思はない教育者は、此の世に如何なる必要があつて存在しなければならぬのだらう。

自分の不意轉任を機會として職員に代つて云ふ事がある。

それは教師は皆宙に迷ひ、ふらくした足どりやつて行くより他ないといふ事だ。どうかして、他の人の意見の受けうりでもいゝから聞いて貰

つて、大體に於て、或まごまごを得たいと云ふ事だ。それは教師を安心させて仕事をさせるものだ。

教師が非常に不安な目暮しをしてゐるのが彼に解らぬのだらうか。冷い眼色を氣づかつて戦々競々として子供を教へてゐなければならぬ状態から一日も早く通れない事を願つてゐるのだ。眼色を覗つてゐなければならぬ爲め御氣嫌とりもしなければならぬ。子供の事は第二義としても。

それから意見が違ふと云はれる前に、立派な教育上の意見を聞かして貰ふ事だ。そして大木の下にゐる様な安心を感じさせて貰ふ事だ。虚無。それはあまりに情ない事だ。

それから自分はあらゆる教職に従つてゐる人の爲めに云はなければならぬ事がある。つまり教師はどの點迄位置を保證されてゐるかといふ事だ。自分の様な不意轉任をやられるとすれば、安心して子供を教へて行く事

が出来ない。何時自分に、災難がふりかゝつて来るかわからない状態にゐる者は、たえず他を警戒し、用意して居なければならぬ。そうした状態にゐて本當に教育が出来るかどうかは餘りに解り過ぎてゐる。心の安定のない所に充實した生活が得られない。

校長の感情に依つて位置生活がどう變じなければならぬかわからぬとすれば、此の上不安な仕事は無い。精神の仕事に携はる者は常に恒久の持続を重じてゐる。急進の出来ない仕事である以上、日一日と進んで行くより他ない。大體の計畫を立ててそれを片端から漸進的にやるより他ない。そしてその日／＼の経過の跡を見つめては楽しみながらやつて行くより他ないのだ。而かも決してそれは短日月に出来る事ではない。

然しかういふ不安な状態に教育者は置かれてあるとすれば、安心して、又楽しみにして仕事の計畫をたてゝやつて行くわけには行かない。兎に角

出来るだけの事はやるとしてもその本氣さ熱に於て甚だしい相違がある。それは理屈では駄目だ。こつ／＼とやつて行く仕事は安心がなければとてもいい結果にはならない。本氣になつてその事だけを考へてゐるといふ事は出来なくなつて来る。絶えず身の廻りの事を考へなければならなくなる。発見すべき事を発見されずに返される。そこに進歩が失くなつてしまふ。精神の仕事に従ふ者は献身的でなければいゝ結果は決して得られぬ。不安から金の事を考へ出す。あらゆる通路を探索す事にとどめる様になる。そして一方の通路をたえず見つけておく事に心掛ける様になるのだ。

それも政治家の様なもので教育者があるなら、意見が違ふと云ふ事でやめさせられたりしても仕方がない。といふよりは寧ろ當然だ。政治の様な政策が明瞭である場合は、それを一般的に遂行する爲めにそれが必要だ。然し教育の根本は決まつてゐる。枝葉の事は個人々々の生れ方によるのだ。

それをかうした處置をとるといふ事は甚だよくない事だ。

この事は決して自分一個人の問題では無い。教育者の共通な問題だ。自分分は飽く迄もこうした事をやる事によつて、教育者の心を不安にする事を恐れそして當路者に警戒しなければならぬ。

自分は敗慘者になつてもいい。全體にかういふ空気を充滿する事は小さな問題ではない。教育者に對しての保證。それが必要だ。

自分が彼とどつちが正しいかを正して貰ひたく思ふ。責任のある人が立會つて貰つて對決して貰ふ事を自分は望む。教育界とても、いつ迄も言論を、抑壓してゐる時では無い。どしどし云ひたい事は云ひ合ひ、少しでも正しい道を進んで行かなければならぬ筈だ。

人々は當分田舎で辛棒してはどうか、といふ。それより他ないのだが、不意轉任には異議がある。温和しく、自分に轉任する様に任せてくれるな

ら自分は喜んで轉任する。が教職にある者を、簡単に左右する一種の名譽毀損に對しては云はなければならぬ。

自分一人は踏み躪られてもいい。が、教育者の運命を勝手に弄び、教育者に不安を懷かしむるのはどうかしてやめて貰ひ度いと思ふ。自分で自分の否を悔いなければならぬ彼にも同情する。然しそれ以上の事なのだ。教育者の位置、生活の安定を自分らあらゆる教育者の爲めに、又子供達の爲めに望んでやまない。

×月×日

我が子供達に向つて告別の言葉

自分が突然貴方々と別れる様になつた理由に就ては何も申しません。それは貴方々に決していゝ影響を與へぬものだと思ひますから。只私が折角貴方々を預つて居りながら、まだ何等満足の出來る様な事をする事が出來

小學教師の手記

ずには別れなければならぬのを衷心から惜しみそして恥ぢるのです。

私は貴方々の取締者、監督者として、貴方々に接しては来ませんでした。貴方々のいゝ友達として自分の弟として、出来るだけの事をしやうと思つてゐたのです。それが充分に貴方々を喜ばせる事が出来なかつたのは、皆自分の罪です。自分はそれを恥ぢます。私が巡査の様な眼をして、絶えず貴方々が如何なる悪い事をしないかを注意し、専念にその方を心がけてゐたならば、或は今より表面上の成績はよかつたかも知れません。然し私は少し遠い所を見てゐたのです。又別の見方をすれば餘り貴方々の内生活にもぐり込んで居たのです。冷淡な第三者として、自分の生活と關係の無い——その言葉が悪いならば關係の少ない立場に立つてゐたならば、私はより多く直接の効果を上げ得た事と思ひます。

貴方々はこの貧しい私から何を得たか。又自分は何を與へる事が出来た

か？ 自分は省みた時、淋しくなります。

若し云ふ事を許して貰へば、私が貴方々に傳へる事の出来たのは誠です。そして自由です。自分は少くとも受持ちである貴方々には誠を始終失はずに来た積りです。貴方々の中の自由さを恐らく亡ぼしたとは思ひません。私は貴方々が私の心の擴がりの中で、自由に喜びあつて生活して呉れる事は何の位望んだ事でしょう。そして私はむき出しに飛び出して来る貴方々の性質、自然さを何んなに泪ぐみ乍ら見つめて居た事でしょう。何も隠さず警戒する事なしに、生きた人間が私の眼の前に飛び出して来るのを、私はじつと喜びを抑へながら見つめてゐたのです。そして私は貴方々を祝福して祈つてゐたのです。

私達大人の部類にはいる者は、貴方々の天真な生々した罪に汚れない心にふれる事が何の位大きな喜びだか知れません。毎日々々人間の汚れた心

を突きつけられて生活してゐる者にとつて、貴方々は尊い清涼劑なのです。貴方々が此の世に居てくれる事は何といふ大きなこの世の光明でせう。又幸福でせう。然し大人は貴方々小供達を、大人になる準備中の者だと考へます。そしてそつて育てる事を平氣で居ます。貴方々の生活は、大人生活の準備だといふ事は、貴方々に對する非常な侮辱なのです。貴方々は貴方々の生活なのです。決して大人になる準備の生活では無いのです。『小供の生活の成長したものが、大人の生活なのだ。』と云へると思ふのです。

こんな事を云ふと或人に叱られるかも知れません。然し私は飽く迄も子供と大人とのつなかりを、そつていふ所で考へたくありません。大人の神経は餘りに貴方々を慮げてゐます。少くも現状ではそつていふより他ありません。大人は貴方々の存在を無視し過ぎてゐるのです。貴方々を時々驚ろかし、怯えさせるのは皆大人の神経の斷片なのです。修身的なものゝ物語が

如何に話されるかを注意して聞いてごらん下さい。貴方々は其處にこれだけの感動を持つ事が出来ますか。貴方々の生活はそれを拒否しはしませんか。大人が力を入れて話す事は兎もすれば貴方々には關係のない交渉のな事が多いのです。それは主として大人が概念的なものであり、子供は絶対に概念を拒否するからです。大人が感心する者、それは大人自身で前々からの心の麻痺を知らずに居るつまり犯され切つてゐるので自分が氣がつかないのですが、單に概念以上に出ない事が多いのです。といふよりはそれが總べてだとも云へぬ事も無いのです。大人の心の隅にころ／＼した塊りになつてゐる者が、すべてを判斷するのです。本然の心にふれて判斷される事は、非常に妙いのです。殊に先生といふ仲間にはそつていふのが無数なのです。ですから全然見當のつかぬ事にも偶然遇つた時大人は迷ふのです。種切れなものに當つた時こつした事の起るのは極めて當然です。時に

は大人の心に争が生じる事があるのです。それは刺戟に遇ふと概念以上のものがひよつこり飛び出して来て、概念で一旦判断してしまつたものを否定するからです。大人はそうした時迷ふのです。そして大抵の場合は概念に勝たして了ふのです。

例へば何かの話の序でに自分の幼年の時の事などが出て来る時があるとします。そうした時はたまたま幼年時代の心が正しく甦つて来る事に依つて自分が今子供達の前に話そうとする事に迷ひを起させるのです。無理に云はなければならぬ場合になつた時、やつぱり大人は自分の幼年時代をそこに立派に描き出し展開させやうと努力するので。それは悲惨です。かなり今の大人にとつて悪いと思ふ事をして居ながら、子供達の前にはいつの間にか完全なものとなつて現はれてしまふのです。滑稽な事は、それが現在の大人の心での判断なので、子供である貴方々には何等の強い響きも興

へはしないのです。風のような神経の頭を一寸撫でただけで過ぎて行くのです。子供にとつて正しい感情を喚び起すものは必ずしも大人の感じに正しい事では無いのですから。それといふのも、つまり大人の先人的な概念で判断し、子供はそんなものでなしにむき出しに、心で判断するからです。これは大人の悲劇とでも云ふべきものです。ですから大人は幼年時代に限らず、自分の過去になりたがらないのです。貴方々が大人といふものはどういふ経路を取つて来たものが。』といふ非常な期待を満足させてくれる事は容易にないのです。聞いたと思ふとそれはあまりに縁の遠い事なのでから。

貴方々は又かういふ事を経験する筈です。子供である貴方々に極く簡単にわかる事も大人の心の中を通りいぢくり廻されてゐる爲め、恐ろしく廻はりくゞくなつて貴方々迄届き、或は解らぬものとなつてしまつて傳へら

れる事があるといふ事を。

藝術家である貴方々には、非藝術家の云ふ事が無理もない事ばかりなのは、悲しい事です。然し此頃になつて、純粹の藝術家の立場から貴方々を研究し出した事は喜ばしい事です。遠からず、貴方々の満足する世界が生まれて来るであらう事を私は喜んで居ります。

S氏は綴方童話の方から。Y氏は自由畫の方から。それから又子供の藝術を研究する藝術家の一群が生れた事など。

然しそれとても、かなり迂曲して貴方々に觸れるだらうとは思ひますが、それでも概念切りしか解らない者に委せられてゐるのは随分違ふのですから。何とかして教育家の仲間から、最も貴方々に接近してゐる人々から、純粹に貴方々の心に觸れ得る人が出てくれたら理想的なのです。そうした人も直ぐ近所に居ない譯でもありませんが。

貴方々の本當の生活に觸れる事なしでは、幾等あせつても貴方々が依然として子供である以上、あまりうまく行きそうにも思はれません。

私がかうした事を恐れてゐる以上、出来るだけ直接なものとして貴方々に傳へたいとは思つたのです。然し悲しい事にそれが本當に不満足にしか行かなかつた事を悔いるのです。然し、貴方々の尊いものを踏みつぶす様な事なしに通して来た事だけは満足に思へるのです。私は決して貴方々を『自分のかたにはめやう。』とは努力しませんでした。よく人は云ひます。『漸く自分の思ふ様になつて来た。自分のかたに、はまつて来た。』と。然しそれは何といふ悲しい事です。全く反對な事ではありませんか。『自分は漸く子供達の生活の仲間入りをする事が少し出来る様になつた。』といふのが本當ではありませんか。貴方々の仲間入りをしなければ決して貴方々を理解する事は出来ません。この意味に於て、私は少しく貴方々の仲間入

りをする事が出来た様な気がするので。偽らない、飾らない綴方を見ても私は貴方々の生活を親しいものに思ひ、尊いものに思はずには居られませんでした。私はこれからも貴方々と一所になつてゐる事が出来たら、貴方々に或點迄満足を與へる事が出来たのだと思ひます。然し不純な大人の感情の争が、遂に私をあなた方から突然もぎ取つたのです。私が口悔しく感じるのは、貴方々に何も今迄に碌な事が出来ずに来てゐたので、これからより深く本氣になつて貴方々と助け合ひ楽しみ合つて、互に寄り掛り合つて行かうとする望を切斷されてしまつた事です。それが同時に貴方々に申譯のない事なのです。

たしかに教育はお互の寄り掛り合ひであり、慰め合ひであり、楽しみ合ひであり、助け合ひであると私は信じてゐるのです。少くとも私自身は貴方々に依つて元氣づけられ勵まされて來た事が非常なのです、何となく自分の

貧しい、つまらないものを與へ、貴方々の尊いものを盗み取つた様な気がしてならないのです。

かう云つた時、私は貴方々に詫びなければならぬ事を思ひ出しました。それは貴方々の前に、以前話した事を裏切る私の神経がちよいと飛び出した事です。それが意地悪く貴方々を怯やかしたであらう事を私は恥ぢます。否そうした神経が飛び出した次の瞬間に於ても、私はいつも責められたのです、私の顔から貴方々の敏感がそれを感じたかも知れないと思ひますが。

兎に角私はこれ切り貴方々と遇ふ機會が無い事でせう。私は取り返しつかぬ事をした様な気がしてなりません。實際に於て、取り返しつかぬ事なのですか。

然し貴方々六十人全體として、無くとも、個人々々として遇ふ機會が無

いとも限りません。否私はある事を望んでやまないのです。貴方々の前途は光明です。然しそれが何時の間にか光明が消え去り、暗黒がその代りになる事があるのを私は恐れます。實際にあり得る事ですから。

あゝ私は貴方の爲めに祈らずには居られません。私の過去を省みて見ても、人生は、光明の持続などは決して云へませんから。それどころでなく全く反対なのですから。

私は貴方々を巡つてゐる大人の神経と、その不純なものが、貴方々にふれる事の一日も遅い事を祈らずに居られません。後長く學校生活をする事の出来る人は、比較的露骨に、大人の神経に觸れる事が少なくなりの時間を通す事が出来るのですか、卒業後直ぐに家庭にはいつてお父さんやお母さんの手傳ひをし、又事情によつては奉公する人もある事と思ひますが、そうした人の上には露骨に、今迄知らなかつた汚れたものが觸れて來るの

です。五年から急に大人と同じ生活にはいる人は、恐ろしい渦巻きにさらはれる事が實に多いのです。私はそういう人々の爲めに、特に祈らずには居られません。

然し貴方々は、或人は學校生活をする事が出来、或人は奉公しなければならぬとしても、互に呪ひ合ひ、怨み合つてはなりません。自分の運命を呪ふ事、それがどんな事かを考へただけでも恐ろしい事なのです。こんな事は貴方々にとつてあまり解らない事なのですが。私は今となつて云はずには居られないのです。お互が助け合ひであり、慰め合ひであるのです。お互は皆大切な友なのです。友といふものはどんなに大切なものは、もう少したつと感じるでせう。それは兄弟以上のものです。本當の深いつながりは眞の友との間にあるのです。信じ合ふ事、それが力です。各々は皆許された事をしつかりとやつて行く事が何よりだと思ひます。境遇を呪ふ

小學教師の手記

事、それは私にもあります。然しそれは決してその人に力を與へてはくれ
ません。たゞ許された所をこつくとやつて行く事が、その人を喜びに導
くものである事を信じます。

私はまだ云ひたい事がある気がします。或は再び遇はないかも知れ
ないと思ふと、私は何もかも云ひ度い気がします。偶然なめぐり合ひが興
へてくれた機会を、私は十分生かす事が出来なかつた事を悔います。これ
も皆私の貧しい爲めなのです。私が足らなかつた事は宥して欲しく思ひま
す。私は陰で、貴方々の爲めに祈つて居ります。その健全な成長を。

今後の選合を私は楽しみにしてゐます。

自分はいざ子供と向ひ合つたら、思ひ切つてこれだけ云へないであらう。
云ふ事が許されぬであらう。そして又彼等に通じぬ所も随分ある事だらう。

が少くとも自分はこれだけの事は云はなければならぬ気がする。この短い
自分の感じだけは傳へなければならぬ気がする。

自分はその子供等と突然別れなければならぬといふのは考へられぬ気が
する。然し事實だ。自分は確かに轉任の辭令を貰つたのだ。不意に。

自分が若し誠意がなく、そして又抱負もなく無定見に、その日暮しをし
てゐたならば自分は何も悔いないであらう。そして悲しみます恥ぢないであ
らう。然し少くも子供に對しては眞剣であつた。至らぬ爲めに終に不満足
を與へたかも知れないが、それが校長の感情を持つて動かなければならぬ
といふのはあまりひど過ぎる。自分の理解の出来ない神經は至る所に在る。
兎に角自分は自分を守つて生きて行くより他はない。そしてつゝましく自
分を生かすより他はない。

×月×日

小學教師の手記

自分は兎に角新しい任地へ行つて見やうと決心した。

自分は辭令を受取つてから二三日、何もかもいやになつて黙つて寝て許りゐた。お母さんが「腹の立つのも尤もですが、世の中はこんなものかどあきらめておしまひなさい。後で幾等も取り返しが出來ますから。」といふ事を何遍も繰り返して云つて呉れた。

『實は私も二晩許り碌に眠れなかつたのですよ。あんまりひどいやり方なので。』と或時云つてくれた。

自分は新しい赴任地の校長に濟まないとは思つたが容易に元氣になれなかつた。寧ろその事、こんな腐つた教育界を去つて他の方面へ轉じて終ほうかと何遍思つたか知れない。然しその度に自分はやつぱりひつかまつた。そして兎に角向ふへ行つて見やうと中心したのだ。

今度の玉川といふのは一體何處なのか自分には解らなかつた。友人達が

地圖を検べて見て自分に知らしてくれたので大體見當がついた位だつた。とても自分から檢べて見やう等といふ勇氣は何處を叩いても出て來なかつた。

辭令を取つた日、親切に玉川の校長が迎へに來て呉れて色々道か何かの事を話してくれたのだつたが、自分は何も覺えてなかつたのだ。が駒澤でおりるといふ事だけはぼんやり頭にのこつてゐた。

自分はその駒澤を頭の中にくり返しながらそれをあてにして出かけた。澁谷の市電の終點から玉川電車の停留場へ行つた時、丁度玉川行きの電車が出る所だつた。

自分は電車の窓から新しく映する景色を眺めながら、車掌の呼ぶ停留場の名を聞き通さない様にと氣をつけてゐた。

駒澤の停留場でありて、その雜貨店で學校に行く道を聞いた。

「この道を真直ぐにおいでになると間違がありません。」そうその女の人は教へてくれた。曇つた空からはぼつり〜と雨が降り始めた。自分も知らぬ間に道を一歩懸命に急いだ。

「何だつて自分は一體こんな淋しい道を歩かなければならぬのだ。」そう思ふとたまたまなく淋しがつた。こんな田舎道を歩かなければならぬとは想像しなへもした事が無つたのだが。と思ふと、あたりの広い、冬枯れのした林などまでがへんに淋しく見え出した。宗洞宗大學といふ大きな石の門の前を通り、ゴルフ倶楽部といふ大きな建物の前を通つて教へられた通り、真直ぐに歩いて行つた。

自分には何となく、落人とか敗残者とかいふ感じが無暗に起つた。ふだんなら動かされる筈の白い立派な太根が川岸に山の様に積まれてゐるのも何の感じも喚び起さなかつた。頭を抑へて見ると、がさ〜とした感じがし

た。竹林の中を通つたり、小さな店の前を通つたりする中に「九品佛道」と石に刻んであるのを幾ヶ所かで見えた。不思議に電線だけが自分の行く道と並行してゐた。そんな事でも何と無く心強い氣がした。

自分は煙草を出して火をつけた。澁谷で、之から先には煙草を賣る店が無いかも知れない』と思つて來たのだった。

自分は自分の姿に時々人生の淋しい旅人を見た。そして自分の歩いて行く道の兩側には健康そうな百姓の人が、せつせと稻を刈つたりなごして働いてゐるのを見た。

何遍か道を聞きながら三十分も少し泥になりかけた路を歩いた時、漸く學校が見え出した。後に林を控へ、側面に廣い〜麥畑を連ねて、學校は小雨の中に肅然と立つてゐた。恰度人が一人もゐないかの様に。その學校が割に大きい事が少し自分を元氣づけた。そして正面に行つた時、そこに

學校の名を大理石にほりつけてゐる、少しせいでいふ感じのする門を見た。

自分は、「此處がこれからの自分の住家なのだ。」と思ひながら小さな砂利で埋めてゐる廣い庭を歩いて玄關の方へ行つた。それは東京ではとても見られない庭だつた。中には櫻の樹が圓形に植ゑられてゐる。

自分が玄關だと思つて歩いて行つた所には子供の下駄箱が並んであつた。こゝでは無いのかと思つて東へ廻つたが、そこも玄關らしい様子でもなく、下駄箱がやつぱり並べられてゐた。

自分は仕方なしに小使室へ行つて校長へ取つぎを頼んだ。

自分は小使の話に従つて、東の口からはいつてすぐそこにある應接室にいつて、校長の來るのを待つてゐた。

暫くして校長が來た。自分は一度向ふの學校で會つた印象が少し許り殘

つてゐたので何となく懐しい様な氣がした。それは一方に於て虐げられた者の淋しさではあるのだが。

其處で色々話して呉れた校長の感じは、決して向ふの學校の校長と同一なものでは無かつたといふより全然違つた種類の人である事がはつきり判つた。

自分はふと忘れてゐた筈の、といふよりは聞いてゐなかつた筈の校長の話が頭に浮んだ。「私は、出来るだけその人の長所を生かす様にして働いて頂く様に心掛けてゐます。」といふのだつた。それが一層自分をひきつけた。それに教育界の最高の權威であるS博士などもかなり知つてゐられる事や又博士などと深い關係のある事などが非常に自分を喜ばした。

自分はそれから校長に願つて一時間學校内を見せて貰ひ、その後今度自分の受持つ事になつてゐるといふ四年の教室へ行つた。

「子供も随分長い間先生をお待ちして居りますから。」と應接室で校長に云はれた語がへんに頭にこびりついてゐた。

自分が教室へ一步踏み込んだ時、異様な臭氣が鼻をついた。自分は思はず立ち止つて子供を眺め廻した。

その時自分の眼に何が映つたのか。自分はその汗によごれた皮膚を持つた、そして服装のきたない子供等が、古びた机に行儀を正してじつとして居るのを見た。

自分は思ひ切つて教壇の所迄歩いて行つて壇に上つた時、校長がはいつて来て自分を子供等に紹介して呉れた。

自分はちつと子供等の方を見廻した。子供等は人形の様にきちんと行儀をよくしてびくとも動かずに自分の方を見つめてゐた。

自分はそれを見て微笑んでしまつた。そして「あんまり窮屈な姿勢でな

くゆつくりしてゐて下さい。」と云はすに居られなかつた。子供等は心持ち體をゆるめたが、やつぱりちつとしてゐた。

自分は何かを話さなければならなかつた。然し何を話していか解らなかつた。といふのは、その臭氣に言ふ氣勢をそがれてしまひ又眞面目になり切つてゐる子供等を見た時云はなければならぬ事を強いられたのだ。

「私は急にこちらへ参る事になりました。不思議な縁で皆さんとお友達になる事になりました。それに就て、私は始めに皆さんにお話して置く事があります。

貴方々は東京の子供に比べてどうであるかを少しお話しして、貴方々がこれからどうすればいゝかを少しお話しませう。

貴方々はかう云つたならば「自分達は田舎の子供なのだ」と妙にひがんでしまふかとも思ひますが、そんな必要は決して無いのです。東京の子供、

又都會の小供はそれなりにいゝ所があるのですし、貴方々は貴方々で又東京の子供に見られないいゝ所があるからです。

實を云ふと私はまだはつきりと貴方々の事は解りません。ほんの少しなので、この學校に来て二三時間、外の生徒の人々を見たり授業を見たりして感じた事で貴方々を判断するのです。それに私も田舎で生れ、田舎の學校で育つたので、それから推量もする事も出来るのです。

東京の子供は頭は非常にすばしく働きます。が貴方々はそうでない代り、どつしりした落付きがあります。そういふとよく聞えますが、それが少しひどくなるさぼんやりしてゐる事になるのです。それは何にも追ひ立てられず、のんびりと暮す事が出来るお陰から來てゐるのですが。それが一方ではいゝ事でもあり、又あまりいゝ事でもありません。しつかりする時はしつかりして、よく物に氣をつける事が大切です。

何より貴方々を見て嬉しいのは、身體が一人も弱そうなる事がないといふ事です。これは東京で見られない事です。皆お父さんお母さんのお手傳をして毎日働いてゐるからだと思います。この身體で、一生懸命に勉強すればきつと立派な人になると思ひます。詳しい事は段々に云ひますが、最初に約束して置きたいのは、私には何も遠慮せず思つた事をどしどしいふ事です。それから決してどこでも嘘を云はないといふ事です。つまり正直といふ事です。そしてきまりよく勉強する時はし、遊ぶ時は何も彼も忘れて愉快に遊ぶといふ事です。私は、貴方々の良い友達である様に心懸けます。皆がお互に仲よく助け合つて、この學校を何より楽しいものにする様に皆で心掛けませう。これだけお話しして置きます。』

自分はそう云つた。そしてその後讀方の復習をした。

放課後になつてから職員歓迎會があつた。自分はわづかはいつた菓子

をかなり嬉しく感じ乍ら食つた。

自分は全然別の世界には入り込んだ様な気がした。そこには窮屈な階級も無かつた。そして自由さが漲つてゐた。職員が皆持つてゐる考を何の遠慮もなく出し放しにし合ふ自由さを持つてゐた。今迄の學校ではとても眞似も出来ぬ様な事が平氣であつた。向ふの學校では咳一つするにも校長の顔色を覗つてからでなければ出来なかつたが、こゝではそんな心配は要らなかつた。遙か高い所に學校で大切にして藏つてゐるテーブル掛を態々ひつ張り出して来て席を拵へて校長を迎へるといふ事も要らなかつた。「静かに。」など職員が叱られる必要は勿論無かつた。お互が談笑の中に充分了解し合ひ決定する事が出来るのだつた。何しろ自分には全然別世界の感じがした。「此處なら自分も働らせるかも知れない。」といふ喜びが湧き出さずには居なかつた。

自分は夕方なりに元氣になつて歸る事が出来た。

が歸りはやつぱり淋しかつた。道はもうよほど悪くなつて、一足毎に泥がべちやりりと跳ね上つた。その中を、少し自由過ぎる程自由な學校の事を思ひながら歩いた。

『どうでした學校は。』

自分が玄關からはいるなり、お母さんは聞いた。

『あゝ、割に住心地がいゝかも知れませんよ。』

自分は軽く笑つた。

『そうれ御覽なさい。だから早く行けばいゝのに。』

『然し何と云つても、私はやつぱりへんに淋しいんですよ。歸る途中電車の中なんかでも考へたんですが、私は一層の事このお寺に弟子入りさして貰つてお経でも教へて貰はうかとも思ふんですが。』

「飛んでも無い。」とお母さんは叱る様に云つた。

「いつか必ず元氣になり嬉しくなる時がありますよ。急な事件の爲めに、心があんまり動かされ過ぎたんですよ。必ず取り返しがつきますから安心しておいでなさいよ。若い中は短氣を起し易いもんでね。」といつてお母さんは笑つた。

自分は黙つて眼を瞑つた。

「まああんまり考へ込まずに御飯でも頂きませう。」小母さんはそう云つて夕飯を出しにかゝつた。

「自分には何もかも解らなくなつた。」そう思ひながらやつぱり黙つて考へ込んだ。

×月×日

目黒への遠足の歸の路

澤山の坂を上つたり下りたりしながら子供達と一所に話し合ひ笑ひ合ひ乍ら歩いた。小川では百姓が大根を一生懸命に洗つてゐる。頬冠りをした女、それから素肌になつて水にひたつてゐる健康さうな男。それ等の人の手で大根は一本々々奇麗に泥を洗ひ落されて川縁に山の様に積み重ねられてゐる。東京に生活する人々の知らない美しい水は、あとから後からと、どつからか溢れて来て、大根を洗ふ人々の廻りで渦巻いてゐる泥を押し流して行く。

自分はちつとそれを見てゐた。

子供達は一寸走つて来ては直ぐに先へへと歩き續けて行く。彼等にこつては普通の事に過ぎないのだ。日常見慣れてゐる事に過ぎないのだ。「なんだ。つまらない。」といふ顔をしては過ぎて行く。

女の子等は流石に、「あんな汚ない泥を、あんな美しい水に流してね」等

と云つてゐる。

自分はそれを聞いてふと思ひ出した事がある。それはまだ故郷にゐる頃、受持ちの女の子が書いた詩だ。

自分はまだ覚えてゐる。——或は多少違ふかも知れないが。——

小さな小川で三人の人は大根を洗つてゐる、一人は女で、二人は男だ。

小川はきれいにすんで、美しい水なのに、きたない大根入れられて

きたない泥の小川になつた。

美しいく小川も、

泥のみつともない川にされてしまつた。

ひとりで、「あゝかはいそうに。」と云つたれば、

大根を洗つてゐる人は、

へんな顔して見てゐた。

或クリスチャンの女教師はこれを読んで眼に涙を浮かべながら「美しい心ね。」と云つた事を覚えてゐる。

自分はそんな事を憶ひ出し乍ら歩いてゐた。四ツ角へ来た時、藪の蔭の方からがら／＼と音をさせて、手車をひいて男が出て来た。肥料を運ぶんだ。その後からも後からもやつて来る。

子供達はそれを見つけた。そして「わあつ」と凱歌の様に聲を立てた。そして子供等の集団がその肥料車を取り圍んで終つた。

自分は餘計な事をしなければいゝがと思つて少しはらく／＼して見てゐた。子供等は別に何をするともなく、十人或は五六人で一臺の車を包んで歩いて行く。その肥料車をひいた人を子供等が知つてゐるらしい。村の人々だらうと自分は思った。或は彼等の父であり、兄である人があるのかも知れない。

自分はその後から黙つてついて行つた。
兩側が太い竹が一杯に生ひ茂つてゐる坂道に來た時、子供達は皆肥料車に加勢をし始めた。或者は肥料の入つてゐる桶を押す。或者は車を押して行く。

『わつしよい。——』

子供等は元氣に叫び乍ら車をおして上つて行く。車を引いてゐる人は嬉しそうにこゝしなながらやつぱり『わつしよい。』と子供達に和しながら引つぱつて上つて行く。

自分は知らず『さあ皆んなで押してやれ。』と云つた。そして自分のこの幸福そうな集團にひつ張られ乍ら坂を上つて行つた。

異様な感に打たれながら。

實を云へば子供等が肥料桶につかまつた時、ひどい事をする。と思つて

顔をしかめた。然し子供等は何の臭味も感じぬらしく『わつしよい。』とやり出した時、しみじみとした嬉しさとも云ふべきものと感じたのだつた。そして間もなく同じ幸福さの中にある異様な自分を見出したのだ。

實に母である土！

彼等は土以上の尊い者を知らない。土は彼等に生命を興へてくれ育て、くれるのだ。

彼等は母に對して尊い貢物としての肥料を知つてゐるだけだ。別にきたないとも思つてゐない。

凱歌を揚げて坂をおし上げて行く子供達の姿。それは決してあまり目に觸れる事のない特殊な美しい物だ。

それはたゞ玉川の林の中でだけ見られるものなのだ。恐らくは他の田舎どうしにも。

坂の上迄行った時、子供等は肥料車を離れた。彼等は坂の上に立ちながら、坂を下りて行く肥料車を見送り、そして反対の方から上つて行く自分を迎へてゐる。

「どうだ。疲れないかね。」

自分は云つた。

「いゝえ。疲れなんかしませんよ。だが然し汗が出た。」と一人の子供が云つた。

「この位の事、なんでもないや。」と別の子供は云つた。そしてその説明を直ぐ後からつけ加へた。

「俺らあ毎朝早く起きて京橋迄車の後押しをして行くんだ。」

「それから學校へ行くんだね。」と自分は聞いた。

「あゝ。」子供は平氣で答へた。

彼等にとつて勞働は一つの義務なのだ。それを終へぬ間は、彼等はひつかいりを持つてゐるので。自由な子供としての解放が無いのだ。と自分は思つた。

彼等には汽車も電車も、一向交渉の無い贅物に過ぎない。彼等は其日の日を平安に怯えずに暮してゐればそれでいゝのだ。土が彼等を見捨てない限り、彼等は平氣でゐる事が出来るのだ。

彼等は東京の近所に居りながら東京を知らずに住んでゐる。彼等が東京に對して持つてゐる興味は、「どんな悪魔がせつかちに走り歩いてゐるだらう。」といふ事に過ぎない。

「東京へ連れて行つてやらうか。」と云つても彼等は別に嬉しそうな顔もしない。彼等は一方には東京からこの地へ飛び込んで來る者に對して一の警戒を持つてゐる。「どんな悪い事を覺えてゐるだらう。」と思ふのだ。

彼等には陸軍大將になりたいたい幻も、大臣になりたいたい幻も無い。大臣とかふものが有るのか無いのかも、彼等は知らない位だ。知る必要が無いのだ。絶えず爪立ちをしてゐる子供等と比べて考へた時、自分はしんみりした親しさを持たずには居られない。俗悪な活動小屋に這入り込んで夢中になつて喜び、その翌日はその真似をして見たり、フイルムの片端を持つて世にも得難い物を持つた様に喜んでゐる子供等の喜びの代りに、彼等には自分の妹、弟を背に負ひ、そら覺えの子守唄を唄つて、無限な感じのする田や畑の中を歩く喜びがある。又朝の空気を誰よりも早く親達、兄妹達と吸ふ喜びがある。それから何物にもうなされずに平和な休息をする喜びがある。

自分は感じる。

都會に育つ子供は、この田舎に育つ子供よりは、親に對しての繋がりがある。

どうしても田舎より強く、そしてしんみりと出来てゐる。都會の親は爪立てをしながら、自分の子供を虚空に吊し上げて、はらくしがら育てゝゐるといふ氣がする。

田舎の親は粗野だ。然し彼等は落付いて自分の後から子供を連れて行く親と子が秋の日に照されながら土に汚れて大根畑で働いてゐる邊り、自分はどうしても、非常にひきつけられるものがある事を感じる。それは親子以上のものがそこに働くからかも知れない。恐らくはそれに違ひない。自然が憎い程落付き拂つて静まり返つてゐる間に、彼等は浮上つたその感じ、それは非常に美しいものだ。そして力だ。

兎に角自分は田舎の親と子の方により多く心をひかれ動かされる。一寸見るとその關係が稀薄だ。言葉も粗野だ。「なんでい、この餓鬼」などいふあたり餘り親しみ好いものではない。がそんな事が自分の神經にひつかう

つてゐる間に、それを飛び超えて、「親と子」が浮き上つて来る。

親、或は兄弟が側についてゐて、しきりに子供を追ひ立て、理屈攻めにして勉強させる都會では、自分はどうしても、ゆどりのあるしつかりした感じのする親と子を感じる事が少くない。泪ぐませる様なものは實に少ない。

遠足で五里の道を歩き終へて歸つた時、子供等は自分達のねぐらに向つて一目散に駆け出して行つた。

「先生さよなら。」

「さよなら。ゆつくりお休み。」自分はそう云つて子供等を見送つた。

氣がついた時、自分は依然として淋しい自分だつた。楽しいねぐらは自分からは奪はれてゐる。「假りの宿」といふ感じのする所へ歸る爲めに自分は歩き出した。

「彼等は満足し切つた、充實した幸福な者共だ。そして自分はあらゆる幸福から跳ね退けられた淋しさそのものだ。」

自分はぐら／＼する頭を抱へながら歸つた。

十畳の座敷の真中に坐つて火鉢を抱へた時自分は祈る様な氣持ちになつた。

「幸福な子供達よ。広い地上を何憚るものなく飛び歩く地の靈の様な子供達よ。自分は御身等の爲めに祈る。何時迄も幸福に育つてくれ。」

それから自分は子供達の幸福な夕食を想像した。

親、祖父母、兄弟姉妹、それらが珠數つなぎにつながり合ひながら、その子が目黒行きの報告をしてゐるに違ひない。御飯粒が口からはね出したるするもの知らずに、しきりに喜び合ひ笑つてゐるに違ひない。側にはカキや味噌を包んで行つた筈の布呂敷が、べつちやんこになつて投げ出され

てゐるではなからうか。

そして彼等を待つてゐる次の幸福は平和なる休息なのだ。

×月×日。

十五夜だ。

この田舎で、而かもこの寺院で見る月。

墓場の杉並木の間から静かに、ほんとに静かに月は登る。あらゆる物の呼吸が止つた様に、何の物音もない。庭に布いた銀杏の葉は黄色く浮き出して居る。

月は全く冷え切つてゐる。

自分の身体は小さく慄え出した。何の爲めかは自分にも解らない。

墓場は静かだ。暗い晩にいつでも墓場でなく名の知らない鳥も、今夜は音をひぞめてゐる。

何かい聲を立て、欲しい。あまりに静かだ。それとも何もかも、もう息を引きとつて終つたのだらうか。

自分は淋し過ぎる。

自分が室にはいつて障子を閉めた時、例の鳥が只一聲啼いた。只一聲だ。それでも兎に角、生物はまだこの世に居る事を知らしてくれたのだ。

自分は子供等の書いたものを綴り込んでゐる物を擴げて見た。そして別に何といふ譯でも無く、子供達のうたつた「月」を探して見た。

(尋六) あ や 子

山の頂きからはつきりした月が、静かに上つて行く。

月の光で道が晝の様である。

あつちでも、こつちでも、

行きあふ人々が「氣持ちのよい夜ですな。」

小學教師の手記



と云ひながら歩いて行く。
 月と同じ様に星もびか〜光つてゐる。
 どちらにも、まけず劣らず。
 池のほとりに佇んでゐると
 色々な事が思ひうかび出す。
 ああ
 梅子さんは此世の人でなくなつた。
 友達三人に別れて、
 私は只一人のこつてしまつた。
 さびしい月夜である。
 さびしい晩である。
 月の光に照された私のすがたは水にうつてゐる。



ひやりと身體に夜風がしもつた。
 その時怖い者でも来た様であつた。
 もう一度
 梅子さんに遇ひたい。
 知らず〜に涙がほくを傳つてゐた。
 (同) 菊 子
 家をはなれてうすぐらい川のほとりを歩いてゐる。
 空には星が一ばいだ。
 月はさびしそうに自分らををらしながらあるいてゐる。
 川の水はしづかに音をたてながら流れてゐる。
 月をたよりに
 妹と三人で足をはやめる

小學教師の手記

人は一人も歩いてゐない
次第々々にさびしくなつて来る。
「早く行つて来やう」といひながら歩いて行く。
川を見ると月は水にくだけて、
水は金銀に光つてゐる。

(同) 久太郎

ぼんやりと見える岩山の頂から
清い／＼月が上つて行く。
みんなで、出た／＼月がをうたつた。
眞つ黒な雲が出て、まつ白な月をによつとばかりにかくした。
みんなで「わあ。」といつたら
又月が出た。

とうくの方から
さびしいあんなさんの笛の音が聞えた。
月とあはせてうたつてゐる様だ。
どこからともなく
すいしい空気をやぶつて
ハーモニカの音が聞えた。
すつと向ふに
黒い人影が見えた。
そこでハーモニカを吹いてゐた。
僕らが行くとはたとまつた。

(同) ともみ子

山のかげからお月様が静かに／＼上つて来た。

小學教師の手記

硝子にうつつたお月様は、
波にくだけた金の様だ。

いくらまんまるいすがたを見やうと思つても

硝子が悪くてせつかくのお月様も波の様にしか見えない。

硝子はやつぱりだめだと思つて

椽側に出て見たら

圓い／＼お月様は

山のかげからは出て来たが

どこに行つてい／＼だらうとろついでゐる様に

中々前には歩かない

雲が無いから歩いた様にも見えない

高く／＼すんだ廣い空の上には

お月様とならんだお星様が
二人そろつてすましてゐる。

(同) ま さ 子

青い／＼空を静かに上つて行く月が

私と妹を土にうつしたら

妹がかげぼうしを見てもんこだ／＼と云つてぐん／＼走り出した。

私も妹の後について走つたら

まだかげぼうしがきえないので妹がむちうになつて走る。

「あつ」と思ふ間もなく

妹は向ふから来た男の人にぶつかつたので私がおかしくてたまらなかつ

た。

内にはいつた妹は

小學教師の手記

さも安心した様にふんと息をついだ。

吉
忠

冷い風が吹いてゐる。

高く澄み渡つた空には月と数箇の星とが動かない。

僕と弟は一人の友達を本町あたりまで送つて行くのだ。

三人の影は墨繪の様に、

街路に黒く横はつてゐる。

月をかすめる白雲は輕そうに何處へともなく飛んでゐる。

一電柱の側にやせ衰へた子猫が一匹

ニヤア／＼と力無くかすかになきながらちよ／＼うろついてゐる。

電燈は彼の小猫に悲しそうな光を浴びせて黒と白のふちた所をはつきり

見せてゐる

友はつか／＼と猫のそばへ走りよつた。

猫をだいた。

「水へ入れやう」と云つた。

僕はどめた。

僕の言葉がまだ終らない中に

はや猫は友の手をはなされた。

小猫は水の中へ落ちて一聲高くないた。

友は笑つてゐる。

小猫は身體をふるはせながら岸へはひ上つた。

秋の半ばの月は青白い光をなげながら

あはれな小猫を見守つてゐる。

かうした美しい子供達は今どうなつてゐるだらう。之は皆六年の時の作

小學教師の手記

だ。或者は女學校、或者は中學校、或者は高等小學校にないつてゐる筈だ。これを書いた當時の純な美しい心持ちはやつぱり輝やいてゐるだらうか。自分は彼等に逢ひたくて仕様がなない。彼等は或は待つてゐないかも知れない。然し自分は懐しい。

學校を卒業した許りの坊ちゃん、弟の様な子供達と一所になつて遊んだ頃を思ふと、自分はなつかしくてならない。

この詩を見ると、自分は子供達の美しい感情がなつかしくなると共に、自分の出鱈目も可愛くなる。

かうした詩を書かせる事は、小學校では少し變則かも知れない。然しこの當時、自分は本氣になつて綴方の時間に書かしたものだ。子供達も本氣になつて書いてくれた。本氣にならずにかういふ作は生れない。もとより自分は子供達を詩人にする積りでも無かつた。自分は只子供の純な感情に

あひたかつたのだ。知りたかつたのだ。それが何よりの楽しみだつたのだ。人は詩を書かせる事を蔭で批難しても自分は平氣でゐた。そしてかうした成績を得た事を決して恥ぢはしなかつた。

自分はその時の教へ子供達が如何に成長して行くかを見るのが楽しみだ。たとへ彼等と別れても、自分が彼等を忘れ切る事が出来ない。頭の好かつた子供達、それからすぐに涙を流した子供達、悪戯許りしてゐた子供達、それが今日自分から見ればどれも同じだ。暖く自分の心に甦つて来る。

自分が若し誤つた事を彼等に傳へなかつたら、又自分の信じてゐた事を彼等が幾分でも感じてゐられたら、彼等の成長は自分にとつた喜びだ。どうぞ自分が喜ぶ事が出来る様にと祈つてゐる。

そろ／＼彼等は大人の曲つた色々な感情の世界に巡り合ふ事だらう。彼等はそこをどう切り抜けて行くか。恐ろしい事だが楽しみだ。

自分がいつか彼等に巡り合つた時、彼等は如何に變化してゐるだらう。如何に自分を喜ばして呉れる事か。又如何に悲しましてくれる事か。

自分は今かうして配所に居て思ひ出一杯になつてゐるとは誰が想像しやう。

どうぞ彼等の上に恵のあります様に、自分は呉にも祈る。

×月×日

〇〇區の或小學校に出てゐる自分の友人が訪ねて來た。久し振りなので自分は盛んに色々な事を話し合つた。

友人は急に沈んだ調子で落付いて話し出した。然し彼は興奮を押し鎮めてゐる事が、彼の眼で解つた。

「僕は今考へてゐる事があるんだ。僕達の様な者にたえられない事が此の世には随分あるんだね。」

「一體どうしたと云ふんだ。」自分は聞き返した。

「かういふ事があるんだ。まあ聞き給へ。」そう云つて友は話し出した。

「僕の擔任に一人の優等生があるんだ。(彼の擔任は尋常三年の男兒だ。) A といふ子供だがね。その子供は頭が鋭敏に出來てゐるが、性格がかなり弱く出來て居るんだ。誰からでも好きがられ、可愛がられる種類の子供なんだ。そしてどつかに甘へる、といふと悪いが何となくさういふ處がある子供なんだ。それも、母が早く死んで終つてお祖母さんに育てられ、一人子として自由氣儘に育つて來た爲めだとも思ふのだがね。」

僕が赴任して間も無くだ。

その A といふ子と A のお祖母さんが尋ねて來た。そしてこんな事を云つたんだよ。

「この子は母に早く死に別れたもんですからそして又只一人なものですか

小學教師の手記

ら氣儘をさせて育て、來ましたので、仲々氣儘な者ですが、今後何分にも宜しくお願申します」とね。實に普通な挨拶だ。がこの挨拶をその後裏切る事實を僕は知らなければならなかつたのだよ。といふのは或日綴方を書かした時、Aはお母さんに連れられて云々の事を書いた。僕は「はてなお母さんが無い筈だが。」と思つたので、Aを呼んで「あなたのお母さんはあるんですか。」と聞いた。僕はその時へんな苦しい感じがしたつたよ。所が「えい。」と元氣よく答へて、圓い眼をきよ／＼させて笑つてゐるんだ。僕は益々へんな氣がしたがそれ以上聞かなかつた。何か隠れた秘密があるに相違ないと思つたのだ。

それだから僕は色々他の人からその家庭の事情などを聞いて見た。少し宛解れば解る程、僕は他人事でない不安を感じ出したのだ。愈々確かな事が解つた時、僕は全くへんな氣になつて終つたんだ。

それはかういふ譯なのだ。

そのAの母は實は確かに無いんだ。とうの昔にね。所が第二のお母さんが出來たのだ。と云つたならば直ぐにAの父が他に女を求めたかどうか位に考へるだらう。處がそうでないのだ。Aがお母さんと呼んでゐるのはお祖母さんの事なんだ。「この子の祖母ですが」と云つたお祖母さんをお母さんと稱するのだ。どうしてそうなつたのかは誰しも考へさせられる事だ。母のない子。そのAの母となつて世話をして呉れる爲めに、子供が母を慕ふ本能とでも云ふべきものから自然に母と呼ぶ様になつたのか。それにはAはまだ餘りに子供過ぎる。母の無い子といふ淋しさが、まだA自身にも解つてゐない時代なのだ。そんなら一體何故お母さんと呼ぶ様になつたのか、そこが自分にたまらない所なのだ。露骨に云へばAは祖母をお母さんと呼ばなければならぬ状態になつたのだ。

今のお父さんは養子だといふ事だ。祖母の娘の養子なのだ。所が娘がAを産んで間もなく、勿論非常に若くて死んで終つたのだ。Aは母の顔といふ者を知らないのだ。所が續いて養父、つまり祖母の夫が死んで終つたのだ。従つて後に遺つたのは、親である筈の祖母と子である筈の養子とそれからAとなのだ。その後それ等の関係が如何なつたかは云ふに忍びない。卑しくも親であり、子である人々が、現在の関係になり、そうしてAが祖母を公然と「お母さん」と呼ぶに至つた事は實に嫌な事だ。

然し僕はそれ等の事を全然排斥しなくてもいいのだ。早く妻を失つた夫それから夫を失つた女、それ等の人々の間に生じた事柄は假令道徳上非常な罪惡であるにしろ、僕は黙つてゐてもいい。然し何故Aに迄「お母さん」と呼ばせるのだから僕には解らない。と同時に非常な不満なのだ。あゝした種類の関係は總て無智だ。それが罪の無いAに迄及ぼし、運命に如何に響

を與へるかを考へる事が出来ないのだ。何もかも同化して終はずには置かない力が、Aをその渦中に捲き込み、犠牲にして終つてゐるのだ。彼等は永久にAは今Aとして考へてゐるだらうが、恐ろしい事に、Aにはこれから一年々々啓けて行く理智の眼があるのだ。それがAの口ぐせになつてゐる「お母さん」に行き當らずには居ない筈だ。その時Aは何と考へるだらう。僕は怖ろしくなる。彼等は恐ろしい冒瀆者共だ。卑しくもAの父にとつてはAは只一人の子供ではないか。そして又祖母にとつては只一人のかへがたい孫ではないか。それを犠牲にして、自分等の喰物にしてゐるとは何といふ事だらう。

僕はAの運命を考へると怖ろしくなる。あの子が何時か、自分の父と、祖母との関係を必ず想ひ出す時機が来る。「お母さん」を。その時彼は何を感ずる事だらう。人は親の中でも母親に對して、特別な懐しさを持つもの

だ。彼は産みの母を懐ひ出した時、何もかも踏み躪つて母に突き進んで行くに違ひない。

「あゝお母さん。すみません。私は怖らしい事をしました。私はお母さんを踏み躪りました。許して下さい。然し實は私はお母さんが貴女であつた事を知りませんでした。お母さんの靈は何の位一人子の私を心配して下さい。つたでせう。同時に怖らしい伏魔殿の様な私のお家をお呪ひなさつた事でせう。何もかもすみません。私はお祖父さんの靈にもお詫します。そしてお母さんの復讐、お祖父さんの復讐をして見せます。どうぞお許して下さい。」
そう泣きながら母の墓の前に膝まづいて咽び泣き齒切りをする青年を、僕は想像する事が出来る。

何だか僕は頭がぐら／＼して来た。
そう云つて友は話を切つた。

「本當かね。それは。」自分はかう聞かすには居られなかつた。

「僕もそれが本當でない事を願つてゐたんだ。所がそれはどうする事も出来ない事實なのだ。僕は本當にどうしやうかと思ふんだ。一體今僕が終りに云つた様な事が起らずにすむだらうかね。」友の眼は不安そうに輝いた。

「さあ、普通の者であつたら、決して温和しくしては濟まない事だね。」

「それに自分はそうした心理状態になつた青年を實際に知つてゐるんだからね、猶更怖ろしいのだよ。」

自分は黙つて考へ込んで終つた。

友は話し出した。一寸もちつとしては居られない風だつた。

「僕はそれを考へると、とてもあのAを教へる事が出来ないといふ氣がするのだ。無責任な様に聞えるかも知れないが、子供の事を本當に考へれば考へる程苦しくなるのだ。そして僕にはとてもかういふ事は耐えられない

と思ふのだ。今の調子で少しでも人間の心といふものを生かして行かうとすればする程、僕はAをさつきの状態に導いて行く様なものだ。その時は決して墓の前でだけですまない。あの一家に對して、父に對して、祖母に對して如何なる事をするか、恐ろしい事だ。温和しくすんだ所で、家を飛び出して、了ひそな氣がするのだ。

若しAの家の運命を狂はさない様にするにはAを良心の魔痺した、親以上の事をする人間にして行かなければならない。そんな事はとても僕には出来ない事だ。理想的に行けば親の不徳をせめず、自分が正しく生きて行く様になればいゝのだが、それが難かしい事なのだからね。

然し何といつてもAが小學校時代を過ぎ中學時代になつた時の事だから今から神經過敏に兎や角云ふのも妙だかも知れないが、僕としては『中學時代になつたらどうかなるだらう。僕は知らない。』で、過すわけにとても

行かないからね。僕は、Aが中學校に入學して、自分の手許を離れて後さういふ事があつたら、やつぱり自分の責任の様に思ふに決まつてゐるのだからね。

實は僕は事情を校長に話して他の學級に轉じさせる様にして貰はうとも思つたんだ。が、校長は笑つてそれを止めて終ふ事は解り切つてゐる事だからね。校長にはその種類の神經が毛筋程も無いのだから。唯、自分いふ事だけを考へて損のない様にして行けばいゝのだからね。子供本位でなく、校長本位なんだから。それは口に云はなくともそれが表れてゐるのだからね。それでそれも止してしまつたんだ。それから思ひ切つて家庭へ長い手紙を書いて送らうかとも思つたんだ。然しそれもあまりだと思つたので止して終つたのだ。一體どうすればいゝのか僕には解らなくなつて終ふんだ。』

「どうすればいいのか僕にも解らない。』自分は暗い箱の中に頭を突き差し
た様な悲しさを感じた。

「こんな事を本氣になつて考へて苦しんであるのが馬鹿らしく他の人々か
ら見えるだらうね。然し僕は考へずには居られないんだからね。』

「全くね。考へずには居る人は幸でね。一體僕達の神経は鋭過ぎるのかも知
れない。そして他の人から見たら、要らない取り越し苦勞をしてゐる様に
見えて滑稽だらうね。』

「然し。』と彼は決然と云つた。

「俺はどうしてもあの子を救はなければならぬ。僕は人から憎まれても
嘲笑されても、濁流に流されて行く、自分の生徒の運命を、みすく見通
す理由には行かない。だが一體どうしやう。』

二人は黙つて考へ込んでしまつた。二人が眼を見合した時、淋しい笑が

同時に浮んだ。

×月×日

教師から僧侶になつた或人が、如何して僧侶生活にはいる様になつたか
に就て大體かう語つた。

「自分は始めから僧侶になるつもりでは無かつた。が御覽の通り私は法衣
を纏ふた僧侶なのです。そして専念佛につかへてゐるのです。

如何して自分はこの生活にはいつたか。それはとても一寸には語り盡せ
ませんが大體だけならお話が出来ませう。

「このつきもお話した通り私は小學校の教員をしたのです。何故小學校の教
師になつたのであつたかは私にもはつきり云ひかねます。何だか誰の力と
いふ事なしに無條件にはいつてしまつた様な氣がします。それには子供の
時の心が少し手傳つてゐるかも知れませぬ。田舎で生れた私は、偉く見え

るものには学校の先生と、それから長いサアベルをさげてあるくお巡りさんどしかありませんでした。何となく先生になつて見たいとは、子供の時思つてゐた事がありました。然しその爲めにあの學校に先生になる爲めにはいつたとは云れません。兎に角私は溫和しく皆にすゝめられてはいつたのだつたといつたら一番いゝかも知れません。

私が師範學校にはいつてから二年頃迄はたゞ跳ね廻つて過しました。何の考へもなかつたのです。三年頃になつてからそろ／＼色々な事を考へ出しました。そして『自分がこゝへはいつたのは間違だつた。』と氣がついたのです。自分にはとてもあつた偽りの多いところへははいり込めない性質がある。世間的な事をしきりに氣にしてゐなければならぬ所は駄目だと思ひました。その頃私は文學に随分心をひかれてゐたので、一生懸命わからぬながらも本を読みました。薄氣味の悪い、幽靈が出るといはれてゐる

文庫にはいつて、寢臺用の毛布を頭から被つて読み續けました。寢室では俗歌を唄つたり、色々な事をして容易に眠る事が出来なかつたので、私はよく文庫にひきこもりました。時々何とかして別の方へ移る方法はあるまいかと思つて考へました。然し今となつてはとても駄目だと思はなければならなかつたのです。その中四年になつて附屬へ教へに行く様になつて、直きに子供を取扱つて見ると、子供の可愛さがわかり教へる楽しみも出て來て、この分なら割に本氣に出来る事と思ひました。そして又兎に角出來るだけやつて見やうと思つたのです。卒業してから二年間に、私が戀をした事が問題になつたので、私は思ひ切つて少し勉強したい希望があつたので東京へ出る事にしたのです。私の戀、それは今から考へて見ると少し滑稽でもありますがその時は眞面目でした。或女教師が——それは非常に悲惨な境涯を経て來た女でした。自分を力とし、そしてどうか一生私の力に

なつて下さい。といはれた時私は迷ひ出し色々苦しんだ末、どうも結婚しやうといふ氣を起したのです。その女は自分より少し年が多く、そして一度結婚して夫に死なれた女でした。それで愈々その氣になつて自分が世話になつてゐる教育関係者や、その他の友人にもはかつて遂々その事に決心してしまつたのです。その時問題が起つたのです、元來私は思つてゐる事をどしどし云つて終ふ方なので色々な事を露骨に云つたのが、仲間の人々の感情を害し、それが動機となつて問題が起つたのです。この事は今さら詳しく云ひたくありませんからその後の結果だけをお知らせして止めておきます。

其後私は上京しました。そして先輩であり自分が信じてゐる友人の所にお世話になつて色々生活上の事で苦しんでゐる時、どうもその女の關係が破れてしまつたのです。私はこの時一飛びに宗教生活にはいつてしま

はうかと思つたのでした。然し私はやつぱりはいり得なかつたのです。

その後又小學校に出てゐたのですが、又面白い事が起つたので、私はどうも宗教生活にはいつてしまつたのです。かう云ふ簡単な様に聞えますが、然し實はかなり色々な苦しみ考へた末でした。私は小學校へ出てゐる時は、及ばずながら子供の事を考へて少しでも性質を損ねぬ様に、いゝ子供になつて呉れる様に祈りながらやつてゐたのです。然し私はとても校長の子供の心を無理難なやり方には賛成が出来ず、さりとて私などの意見は少しも用ひてくれやうともしませんので私は全く途法にくだのです。とても私はかうした偽りの多い所には生活が出来ないしむざむざ小供の尊い物を損ねてしまひ、運命に迄も影響するであらう事を考へた時、私はもうたえられなかつたのです。それに俸給が少くないので思ふ様な本も買つて讀めない始末なのです。さらばといつて私は純粹に金の事

許りの爲めに働く生活にもはいる事が出来ませんでしたのでどうしやうかと思つて考へました。金で苦しめられる事は本當にいやな事です。必を暗くし、卑屈にしてしまひます。が私が妻を持ち子を持つた時の事を考へるとやつぱり金の事を考へずには居られないのです。許りでなく私一身さへも育てる事が出来なかつたのですから、

私は何遍會社へでもはいらうと決心したか知れませんが、然し私はその度にひつかかりを感じたのです。自分がもう精神上での仕事はもう出来ないのか。要求を諦めてしまつたのかと反問した時。私はどうしていか解らなくなつたのです。精神の仕事には未練があり過ぎたのです。教育の仕事それも私は出来るだけやつて見たいと思ひました。然し私の考へる事と要求は校長級の人々とはとてもあはなかつたのです。信ずる事の出来ぬものを然かも正しくないと思ふ事をやつて毎日々々たゞ僅かの俸給の爲めに働

くといふ事は私にとつて非常につらい事だつたのです。

私はつくづく自分自身がいやになりました。此の世に置き場がない様な淋しい思ひに悩まされたのです。

私はそれから一週間許りの間一生懸命に考へました。考へたといふよりは迷はされいぢめられたのです。

それから又今迄の私の生活を省みた時、私はたまらない不快と心細さを感じたのです。私はそれやこれやで自分自身に對して絶望的になつてしまつたのです。一その事こんな不必要な、どうにも生きる事の出来ぬ身體は無くなつた方が増した。とも考へました。

私の居た所はお寺だつたので、私は常にお經を讀むのを聞いてゐたのですが、此の頃になつて、それが非常に私の心をひいたのです。

私はどう／＼お經を教へて貰ふ様にお願しました。毎晩々々、その住職

の方は町亭に私にあるお經の講義をしてくれたのです。私がお經を覺えた
かつたのは、つまり先きに話した、私の絶望からだつたのです。

その中にお經が非常に私をひきつけました。住職の方の熱心さが私をつ
く込ますには居られませんでした。私が眼を瞑る様にして、ちつと聞いて
來る時、私の心が不思議に平和になる事が出來たのです。そして或光明—
それは非常にほんやりしてゐたものではあつたのですが、少しづつそれ
を感じ出したのです。そして私は救はれたといふ氣がしたのです。

私はその時、自分は一層の事僧侶になつて心から人々の靈を吊つて行か
うと決心したのです。

私がかう決心した時、住職の方に弟子にして頂く様にお願ひしました。住
職の方はその時『貴方は本當にこの社界から退き切る事が出來ますか。僧
侶といつても決して呑氣に許りはいきませんよ。若し本當にすべてを投げ

すて、新しく道を需められるつもりなら出來るだけの事を致しませう。然
し果して貴方は巷にゐた楽しい事を忘れ切る事が出來ますか。』

と云ひました。私は『出來ます。私にはもうこれ以上の望みは無いのでご
ざいます。』そしてとうとう私はその寺にお世話になる事になつたのです。

云ひ忘れましたが、私はその前に學校をやめてしまつたのでした。

實を云へば私はその後かなり長くの間社會の事を忘れ切る事がありませ
んでした。新聞等も見えてはいけないとは思ひ乍らも、やつぱり色々な事に
眼をうつさずには居られなかつたのです。が長い間に私はとうとうそれに
打ち克つ事が出來たのです。

そして御覽の通り今ちむさい老出家となつてゐるのです。山の中の小
さなお寺、そこが私の安住地なのでございます。妻も子供もありません。皆
靜かに健康に暮してゐるのでございます。何は無くとも私達は不幸だとは

思ひません。これが私の生涯の筋道なのです。」

これは自分に向つて直接に話されたのでは無い。何年か前に會つた切り
久しい間會はなかつたといふ友人を訪ねられた時、そこに居合せたこの
人かに話してゐるのを、自分も側に居て聞いてゐたのだ。

×月×日。

晝の休みの時間が過ぎて、午後の授業が始まつた時、教室にはいつて行
つたら、子供等は妙に落付かない顔をしてがや／＼してゐた。

その中に一人の子供が叫ぶ様に云つた。

『先生Bさん達が犬を殺したんです。』

自分は聞いてはつと思つた。ごきりとした。同時に顔をしかめてしまつ
た。

自分のがや／＼してゐる聲の間から次の教語を聞いた。

『棒でなぐりつけて殺したんです。』

『眼の所と口から血をだら／＼流して舌を出して、四つ肢をだらりとして
びく／＼息をついてゐるのを私が見たんです。』

『麥畑をまるで踏み荒してしまつたんです。四人で。』

『Kさんが真先に犬をだいて川に放り込んだのです。』

『かはい丸々と肥つた犬だつたがなあ。』

その子は本當にかはいそうに思つてゐる様に聲を震はせながら云つた。

自分は暫くの間黙つて聞き乍ら、子供等の口から呼ばれた四人の子供の
顔を交る／＼見つめてゐた。

その子は子供の云ふ所ではBとKとAとMであつた。赴任以後まだ十日
位しかたつてゐない自分はその子供の性質を殆んど知らなかつたが、その
時自分は始めてその子供の顔に、或慘酷な表情を見る事が出来た。

人一倍こんな事に對して鋭敏に働く自分の神経は著しく興奮し、遂に泪ぐみさへもした。『何といふ事をして呉れたらう。』自分はそう思つて冷ひ水でもあびせかけられた様にひやりとした。

その四人の子供等は割に平氣な顔をしてゐた。Aといふ子はさすがに氣まり悪そうに時々自分の方をぬすみ見ながら下の方を向いてゐた。Kは黒い顔から鼻を垂らして、妙な光を持った眼で黙つて自分の方を見つめてゐた。BとMはぼかんにしてゐた。

自分は兎に角普通の授業を始めてからその四人の子を呼んだ。自分の中にはその子供を非常に慘酷な目にあはしてやりたい或神経が働いてゐた。然し自分はそれは間もなく制する事が出来た。

『どうして貴方々はそんな事をしたのです。』子供等は一様に下を向ひて黙つてしまつた。一寸自分が云つた時一寸顔をあげて自分の顔を見たのだつ

たが、直ぐに下を向いたのだ。彼等はその時自分の顔に何を見たらう。自分も自分の顔に何が出てゐたかはわからない。然し彼等が正視する事が出来ぬものが出てゐたに違ひない事は自分も想像する事が出来る。——彼等の惨忍な性質に對する憎悪と、汚してならぬものを汚した怖ろしさ。犬の苦痛を直接に感じた苦しい心と。恐らくその混亂した姿であつた事だらう。

「貴方にはどういふつもりで、かはいい罪のない犬の命をうばつてしまつたのです。」

その時Bが云つた。

『その犬の家の人を川に放り込んでくれと云つたのです。』

『何故貴方々はそんな事を請合つたのです』

その子は黙つてしまつた。

「貴方々にその犬はどんな害をしたのです。貴方々が可愛がつて呉れるだらうと思つたからこそその犬があなた方に捕られ抱かれたのです。その犬を何故貴方々は川に放り込み、又叩きつけて血を流させ、殺さなければならなかつたのです。」聲が少し震へてゐるなど自分で意識した。

「貴方々が生きてゐる者の命を奪ふといふ事がどんな恐ろしい事だかわかりませんか。」

子供等は黙つてゐた。

「若し貴方々がそんな目にあはされたらどうです。」

AとKとは一寸びくりとした様に自分の顔を見たが又下を向いてしまつた。

自分はその時泪ぐんでゐた。

「あゝ貴方々は今日かはい、生物の命をこり上げてしまつたのですね。」

自分は一人言の様に低く云つた。そして自分も眼を瞑つてしまつた。

「貴方々は血を、真赤な血をたら〜と流しくん〜泣いてゐる犬を何と思つて見てゐたのです。」そして自分は彼等が一度犬を本氣になつて撲りつけた時、彼等の惨忍性が怖ろしく燃え上り、血を見た時、夢中になつて殺してしまつたのだと思つた。そして自分ながら如何してそんな惨忍な性質が飛び出しのかとぼんやり夢の様に考へてるかも知れないと思つた。一度傷けた時、最後迄やつて了はなければならぬ心理状態を考へてぞつとした。自分で意識してゐないものが飛び出す瞬間か人間に在る。それをびたりと抑へつけることは如何に又難かしい事であらう。

自分は彼等を憐れむ氣持ちになつて來た。そして非常に隠かに彼等に、漸く聞える位の音調で次の物語をした。

「私がすつと前に、丁度貴方々位の時にかういふ事を何かの雑誌で讀んで

まだ覚えてゐます。

それはかういふのです。

清一といふ子供の家にかはい、白犬がゐました。清一はその犬を非常に大切に、外を歩く時などはいつでも一所に歩きました。何か甘味しいものでもあればその犬に分けてやらすに自分だけで食ふのが、気がすまぬ程可愛がつてゐました。白犬の方でも清一を見るとき、尾をふつて飛びついたり、くるくると清一を巡り歩いたりして、非常に慕つてゐました。

又清一の家とは二丁程離れた所にごく性質のよくない、人からも嫌はれてゐた、春二といふ子がありました。清一の方は学校でも先生方や子供達から好かれ敬まはれてゐましたが、春二の方はいつでも悪者扱ひにされてゐました。

或日清一が学校から歸ると大切な「白」が見えません。いつもであつ

たら、誰よりも先きに清一が歸つたのを見つけて喜ぶのは「白」なのでしたが、その日はどうしたものか見えませんでした。

清一は非常に心配し出しました。どこかへ行つて道を忘れたのではあるまいか。又川へでも落ち込んでしまつたのではあるまいか。又誰か悪い人に殺されてしまつたではあるまいかと思つて、家へ歸つて机に向ひながら本は一頁も讀めませんでした。清一はそれから川ぶちのあたりを「白々」と呼びながら歩いたり林の中を探したりしましたが「白」はやつぱり何處にもゐませんでした。それから清一は「若しや春二君の所へ行つてゐはしまいか」と思つて春二の家へ行つて來ましたが、春二は「來なかつた」と云ふだけでした。春二はその日憎けて学校へは行かずに途中で遊んで歸つたのでしたが家の人は誰もそんな事は知りませんでした。

清一はがっかりしながら家へ歸つて來ました。誰か春二が殺して知らん

ふりしてゐるのだとは気がつきませう。春二が、「來なかつた。」と云つてから「いや來たのさ。それを俺が殺して藪の中に放り込んだんだ。がお前には解るまい。」と肚の中で云つてゐる事を、どうして清一が気がつく筈がありませう。清一はその晩は碌に眠れなかつた程「白」の事だけ考へてゐました。

それから何日たつても「白」の姿はやつぱり見えませんでした。清一は學校から歸つても誰も迎へに出て呉れる者もなければ、又仲よしに遊ぶ者もなくなつて、大抵の時はふさぎ込んで許り居ました。

清一の近所に稻荷様がありました。「白」はその後人に見つけられて皮を剥がれ、太鼓を張る人の手に渡り、そして或人の手でそれが稻荷様に献上されてゐるのでした。

丁度初午の晩でした。

清一が床にはいてうつら／＼してゐると「どん／＼／＼」と太鼓の鳴る音が聞えました。「夢だらうか。」清一はそう思つて耳をすまして聞きましたが、それは夢ではなく、やつぱり太鼓が鳴つてゐるのでした。「誰が一體夜遅く稻荷様に行つて太鼓を打つてゐるのだらう」と思ひながら枕から頭を離してちつと聞いてゐました。所が太鼓の音の中に交つて犬の鳴く聲が聞えて來ました。清一ははつと思つて身體を半分起して耳をすましました。「白」がいないゐる。「清一は胸をおどろかしながらそう思ひました。聞けば聞く程、それは清一が忘れ切る事が出來ずにゐる「白」の聲なのでした。清一はむつくりと床をおきました。そして家のくゞり戸をあけて外へ出ました。外は月があつたが雲の爲めにうす暗い晩でした。清一は太鼓の音のする稻荷様の方へ歩いて行きました。ふだんならばとても夜一人で杉のこんもりと繁つて薄暗い氣味の悪い稻荷様へ行けないのでしたが、その晩

は清一は何も怖く思ひませんでした。たゞ『白』にあへるといふ事だけを樂しみにして歩いて行きました。

稻荷様のうす暗い木立の中にはいつた時、『私がこゝにゐます。白です』といふ聲を聞きました。清一は怖いのも何もかも忘れて暗い所を走りま

した。稻荷様へ着いた時、太鼓の音はびたりとどまつてしまひました。あたりも見ただが誰も太鼓を打つた者が居りませんでした。ふと上を見た時清一はそこに何を見たのでしたらう。それは太鼓からすうつと抜け出して見える『白』の姿でした。

「おゝ白、清一は我知らず叫びました。

その時『白』はなつかしうに清一の顔を眺めながら『私はもうこういふ姿に變つてしまひました。折角大切にされ可愛がられてゐましたが、春一

の家へ何氣なく行つたのが誤りで、とう／＼棒を持つて撲られて殺されてしまつたのです。それから色々の人の手に渡つて、とう／＼かういふ姿になつてしまつたのです。』と今迄の事を物語りました。清一はこらへ切れなくなつてそこに泣き伏してしまひました。『白』はなほ續けて云ひました。『今晚太鼓を鳴らしたのは誰でもありません。貴方にこの事をお知らせ致すために、自分で鳴り出したのです。』

『あゝお前がとう／＼あの悪者の春二に殺されてしまつたのか、口惜しい事をしてしまつた。がもう仕方がない。私はお前をどうかして今迄のお前の居た私の家へ貰ひ受ける様に神主様にお願ひして見る。そして今迄の様に可愛がつてやる。』と清一は泣きながら云ひました。

次の朝清一が眼をさました時、枕は泪でびつしよりとぬれてゐました。

「あゝ白にあつたと思つたのは夢だつたのか。」と思ふと、清一にはかに

悲しくなりました。それでも、『若しやと思つて稻荷様へ行つて見たら、新しい太鼓がつるされておりました。』あゝこれが白なのだ。夢はこれだったのだ。』と清一は嬉しいやら悲しいやらで泣いてしまひました。

『あゝやつぱりお前は殺されたのか。』と云ひましたが、太鼓はやつぱり何の音も無く静かにつるされたまゝびくともしませんでした。

然し清一は『この太鼓が白の皮で張られたのだ』と思ふ事には變りがありませんでした。その後清一は神主様に譯を話してその太鼓を頂き、そして別の太鼓を上げる事に致しました。そして清一は、生きてゐた時の白を可愛がる様にその太鼓を大切にしたいといふ事です。』

そう云つて自分は口をつぐんだ。そして附け加へた。『この物語の中の犬の心をよく考へてごらん下さい。生き物は我々と同じ命を持つてゐるので、それを何の罪も無いのに、殺してしまふといふ事は非常に悪い事です。』

この物語にもその後『白』を可愛がつた美しい心の子はごうなつたか。それから罪も無いのに殺してしまつた春二はごうなつたかといふ事が書いてありますが、それは云ひますまい。兎に角、あなた方はよつく自分達のやつた事を考へてごらん下さい。』

自分はそれから暫くの間ちつと首をたれてゐる四人の子供等を見つめてゐた。Kの眼からはほろ／＼と涙が流れてゐた。その他の子供も皆涙ぐんでゐた。

『私達が悪うございました。ごうぞ許して下さい。これからは決してそんな事致しませんから。』Kは低い聲で涙の間からそう云つた。『悪かつたと本當に思ひましたか。私は許すといふ事は何でもありません。そして又許してゐるのです。が一體私におわびしただけですみますか。』
そして『犬にはごうします。』とつけ加へた。

「丁寧に埋めてやります。」とSは云つた。

「あゝそうですか。憐れな犬の爲めにそうして上げなさい。そして石を持つて行つて小さなお墓をこしらへてやりなさい。そして出来るなら、お盆などには皆のお家のお墓の様に大切に詣りなさい。それで私も満足です。時々可愛い罪の無い犬のお墓の事を思ひ出しなさい。犬もそれで喜ぶでせう。そして貴方々が立派な人になる事を祈つてくれるでせう。」

自分は静かにそう云つた。

子供等は安心と満足とを感じた様に顔をあげた。涙にぬれた顔には新しい生々としたものが生れてゐた。

「長い間座りつゝけたので足がしびれるでせう。ゆつくり足を延ばして、それから立つて自分の席へお歸りなさい。」と自分は云つた。

「大丈夫です。」とBは元氣に云つた。

自分は一人でかうして子供等を叱つた事をわびた。

「自分は實はこんなにして子供を叱る事を好まない。然し云はずには居られなかつたのだ。子供等は悔いた時、自分の少し酷な性質を感じる。が子供等と共に満足を感じ合ふ事が又自分にとつて非常な喜びだ。」と胸の中で辯解した。

×月×日

村の教育基金を集める爲めに春秋二期に開くといふ品評會の爲めに、子供等に繩なひをさせた。かうした子供の製作品、繩、袋（主として果物の虫除けに用ひられる紙製のもの）裁縫品等が、子供等の手によつて作られるのだ。村の人達は農産物を持ちよりそれを賣る事に依つて、幾分でもその基金の中に寄附をする事にする。子供等もその仲間入りをして働らき、その製作品を賣る事によつて寄附する事になるのだ。

自分の級は、繩と、袋とをこしらへる事になつた。
自分はその監督をしてゐた。繩をなふ子供等は日向に蓆を布いてその上に胡坐をかいて懸命になつてゐる。自分の家からめい／＼、藁を持つて来て。それから一方の者は教室で袋張りをしてゐる。それは繩なひの出来ぬ子供等だ。

自分は始め四年位の子供が繩が出来るとかと思つて懸念してゐた。然しそれは自分の要らぬ心配に過ぎなかつた。

然かも子供等は休みの時間の中からその仕事にかゝる。皆一生懸命になつて、人に劣らぬだけの仕事をしやうと努める。

陽はほかく／＼と照つてゐる。雪が降つたかと思はれる程に、ふくれ上つた、美しい霜柱は大抵どけてしまつて、土が乾いた。校舎を背にして陽當りのいゝ小さな砂が白く乾いてゐる庭で、子供達はめい／＼自分の好きな

所に席をこつて繩の製作を始めた。それは多くの者は晝休みの中から始めた。中には晝飯も食べずに始めたものもある。

自分はその間を巡りながら、子供達がせつせと急いでゐる仕事を眺めた。小さな手が器用に動いて、繩はその小さな手の下から這ひ出して行く。そして藁の先は子供等の手で上手にあやつられて、圓く／＼動いて行く。

自分はかなり強い興味を持つてそれを見つめた。子供達は身中で、藁から出る藁屑、埃を頭から被るのも平氣でやつてゐる。皆元氣だ。その顔はどれも微笑んでゐる。明らかに彼等は楽しみながら仕事をして居るのだ。子供達はがや／＼話しあひながらやり續けてゐる。

「おい君いくら出来たえ。」一人が云つた。

「まだ少ししか出来ねえや。君はまあ随分出来たね。」

「君の藁は少し打ち過ぎて軟くなつたらう。」

『そうだ。草履を作るにや丁度いゝんだがな。』

そこへ別の子供が口を入れた。

『一體その藁は君が打つたのかえ、』

『うむ俺が打つたんだ。』とその子は元氣に答へた。

『そりや偉えや。實はこの藁は俺が打つたんだ。』とさきの子供が云つた。

そして三人は愉快そうに笑つた。

『やあ手がかさ／＼して来た。』と別の方にゐる子は云つた。といふよりは叫んだ。

『本當だ。手がすべ／＼して来た。まるでしゃぼんで洗つた様になつた。』

それは彼等に満足を興へ、幸福を興へるものだつた。自分が仕事をしたといふ氣持ち、それは彼等が感じる事の出来る満足の一つであつた。

『大變上手だね。一體貴方々は家でも繩なひをするんですか。』と、自分は聞

いた。

『え、時々します。』

『繩ごころでない草履でも草鞋でも作れらあ。』

『俺らあ、草履はかなり上手だよ。學校ではいてるのは俺の作つたものだ。』

三つの聲が殆んど同時に入り亂れた。

『感心だね。』そう云つた時自分は一人の遅刻した生徒の事を思ひ出した。

その子は二三日續けざまに遅刻したのだつた。

『誰だつたね。今朝京橋へ行つて来たのは、』

子供はそれを聞きつけて、『おい京橋々々』

と呼んだ。それは二日許り遅刻の辯解に京橋へ行つて来たといつたので、子供等はそれを覚えてゐて、半ば叫氣持ちで叫んだのだ。

「こゝにゐるよ。」そしてその子は「おい先生が呼んでゐるぞ。行けよ。」と云つた。「いや来なくてもいいよ。私が行くから。」そう云つて自分はその子の所へ歩いて行つた。その子は何か叱られてもするかも知れないといふ様な顔をして、自分の方を見つめた。

「あなた今朝京橋へ行つて来たと言つたね」

「えい」その子は顔を赤くした。

「何しに行つたんです。」と自分は隠やかに聞いた。

「車の後押しをして行つたんです。」とその子は答へた。

「時々行くんですか。」

「えい。」その間彼は手から繩を離さなかつた。

「感心ですね。」自分はそう云つた時、「俺も今朝三軒茶屋まで車の後押しして行つて来た」と他の子が云つた。

「今朝の様な時は寒くて困るだらうね。」

自分は今朝の霜柱の事を頭に浮べ、又七時過ぎ迄床の中で縮こまつてゐた事を思ひながら云つた。

「少しは寒いや。ね君息が眞白に見えらあ、馬の鼻息の様にな。」三軒茶屋へ行つて来たといふ子は元氣にそう云つて、他の子供の方へくると頭を廻した。

その時ベルを鳴らし乍ら自轉車に乗つた人が通つて行つた。「おゝしつかりやれよ。」そう云つてその人は一人の子の方を見て笑つた。「あゝこんなになつたよ。」その子供は繩を尻の後の方から急いでひつ張り出して見せた。

「やあ蛇が蛙を呑んだ様なものが出来た。」

遠くの方で仕事をしてゐた子供は繩を高く上げて笑つた。その側で「えいろくに出来ねえ。」そう云つてかんしやくを起してぶつりと繩を切つた子

供もあつた。眞赤になつた顔をして、眼をきよろ／＼させて居た。

「やあ薬を誰れか呉れないかなあ。なくなつちやつた。」どこかでそういういふ聲がした。

「そういふもんだ。慾張つて晝飯を食べないでやるんだから。」と誰かゞ云つた。

「やあ随分働いたな。」

頭の上で大きな聲がしたのでその邊の子供等は振り返つて後上を見た。袋張りをしてゐる子供が窓から頭を出してゐた。

「なあんだ。びつくりしたよ。何枚出来たんだ。」

「まだ二十枚しか出来ねえや。冷たくて手が動かなくなるんだ。君達は暖かくていゝな。」

その子供は云つた。

「だから繩をなへるんだよ。」

「だつて出来ないんだから。」

「役立たずだな。」

そしてその子供の頭が又見えなくなつた。自分はそれから教室へはいつて行つた。そこでは十二三人の子供が一生懸命に袋張りをしてゐる。「冷たいんです。」そう云つて手を口に喰へてゐる者もあつた。

新聞紙や、古雑誌でこしらへた小さな袋がそこにもこゝにも散ばつてゐた。

「まだ十六枚しか張れねえ。」

「俺は三十枚にあと一枚だ。」

等と勝手に自分に報告する。

自分は少しの間教室に居てから又外へ出て行つた。或子供はもう仕事か

なくなつて只足を延して、手と足に繩をひつかけて上手に輪をこしらへて
ゐた。

『やあ一ほうしか出来ねえ。』その子供は叫んだ。

別の方では櫻の木に繩をひつかけて二十間許りの間を飛び歩いてゐる子
供が居た、自分の仕事を眺めて喜び切つてゐた。丁寧に繩にはえた毛をむ
しつてゐる者もあつた。

隅の方に一人の子供が藁屑だらけな身體をして、繩をかへて走つて行
つた。そして束ねる爲めに出来てゐる杭にひつかけはじめた。中には三間
許りしか出来ない繩をもつてうろ／＼してゐる子もゐた。

何にしる彼等は有頂天だつた。仕事の跡がすぐ眼の前に見えてゐるのが
何より彼等を元氣づける様に見えた。

『もうみんなであとを片附けなさい。時間だから』自分がそう云つた時ま

だ藁のある子供は口悔しそうに「もう時間なんですか。」と聞いた。

『随分草疲れたでせう。』

『いえ。』事實彼等はちつとも疲れてはゐないらしかつた。

或子供は赤くなつた手を眺めながら云つた。

『手が少しひり／＼するぞ。』

彼等に依つてこしらへられた繩の束はわりに規則正しく整つてゐた。中
にむしやくしやに折り曲げた、毛むくじやらの一つあつた。それを見
つけた子供は叫んだ。

『やあ／＼これ誰のたえ。まるで鳥の巢の様だ。』そして高々と持ち上げた。

その時一人の小さな子供は顔をふくらして走つて來た。

『俺のさ。』そう云つて奪ふ様にとり返して又もどの所へ置いた。

子供達は皆で庭一杯に散らばつた藁屑を拾ひ始めた。

一人の子供が櫻の木にひつかりつてゐるのを見つけて云つた。

「こんな事をして置くと、鳥に盗まれるせ。」

一人の子供はぬけ目なくつつ込んだ。

「盗むもんか。春でなければ持つて行きはしねえよ。」

庭は奇麗に掃除された。

「あゝかはいそうに菜がしほれた。」誰か云つた、

「今朝の霜だ。」二人は云つた。

そして皆ごや／＼と仕事をかゝへ乍ら表庭の方へ出て行つた。

×月×日

今日二三の新聞が、松本訓導が自分の受持ちの子供が川に落ちたのを救はうとして、川に飛び込み遂溺死してしまつたといふ美しい殉職者の死を報じた。その子供は川へ落ち切らずと何かにひつかりつてゐて救はれたが

松本訓導は遂に溺れてしまつた。其所は俗に人喰川といはれる危険な場所であるといふ事だつた。

自分はこの記事を読んで泪ぐんだ。自分の教へ子を救ひ上やうとして自己の生命を省みる暇が無かつた美しい行爲。それは恐らく何の人にも感動を興へずにはおかない事だ。美しい精神の現れた。それは教育者にとつてごれだけ子供は直接なものであるか。又ごの點迄子供と教育者の生活がからみ合つてゐるかを現はしたものだ。教育者にとつて、その教へ子は生命の一部分なのだ。然しこの事を第三者で感じてゐる人は極めて少數な様に見える。そして教育といふ事は子供を相手にして、いゝ加減な事をして遊んでゐる非常に呑気な仕事の様に思つてゐる。がそれは本當に教育者の生活を知らない人の感じであり、観察である。松本訓導の死は何を語るか。教育者が自己の日常の生活を反省しなければならぬと同時に、第三者はそこ

に教育者の生活の大部の現はれを直接に感じ得たであらう。教へ子の一人の危急を見て、何を考へる餘裕も無く、その危険の中に飛び込んで行く精神は、常に或距離に子供を距て置いて冷く眺めてゐる者に現はれ得べきものでは無い。密接に繋がり合ひ、彼我の生活の區別がなくなつてゐる者にのみ現はるべき精神だ。

松本訓導の死の動機は至純だ。

或は誰か「松本訓導は少し輕卒だつた。その子が本當に川に落ち込んだかどうかも見すと、着服のまゝで川に飛び込むといふ事は無謀だ。よしその子が川に落ち込んだとしても、恐らく救ひ得ぬ事だらう。」と云ひそな氣もする。否實際にそれに類した言葉を耳にした。かういふ語を發する人には松本訓導の生活は解つて居ないのだ。子供が川に滑り落ちた瞬間、松本訓導の心は一切の批判を超えた決定に達したのだ。そのシーンは此の

卅以上のものであり、随つてその行爲は簡單に批判され得べき性質のものでは無い。

あゝ松本訓導の美しい精神の現れ！。それは永遠である。縦令肉體は死んでも、その精神は永久に人の心を鞭撻し、勵まし、感謝を與へる者だ。教育者は眠つてゐる心を呼び起され、或は自分の中の尊いものを意識し、第三者は教育者の尊い精神によびさまされる。

或教育者は曾てかういつた事がある。

「自分達はいつでも死の準備をして置かなければならない。何故なら自分等の受持つてゐる、親達から托された大切な子供の上に、如何なる厄難が起り、それと同時に自分の生活がそれに殉じなければならぬ場合があるかも知れないからだ。教育者はこれを誰でも覺悟してゐる筈だ。火事の時、家から出ずにまご／＼してゐる自分の教へ子があつた時、或教師は血眼に

なつてその子の名を呼びながら、今にも火の屋根が上り落ちそうになつてゐる所へ飛び込んで行つてその子を抱へて來たのを自分は知つてゐる。自分の生命を省みてゐる事の出來ぬ場合がたまに起る。その時教師はさういふ行爲をする。實際教育者といふものはその位な事はしかなない者だ。同時にするべきものだ。何も坑夫等許りが生命がけでは無い。自分達にしるそうだ。何十人といふ大切な子供を預つてゐるのだから。」

が世間の人は教育者のかうした心は全く無理解だ。又教育者自身もいざといふ場合に始めてわかるこの精神のある事を意識しない事が多い。

何しろ教育者は、子供の親達にとつて何にも換へ難い子供を預つてゐる親の中には、子供がある爲めに許り、此の世に生存の意義を感じてゐる者が多い。その親達にとつて、子供以外に自分の生命は無い。たとひ誰にしる、子供は親にとつて生命の連続であるのだ。或母親は子供の死の爲めに

發狂した。或父は一人子の死を悲しんで自殺した。

自分はかうした種類の生々しきまだ頭に遺つてゐる一つの事實を知つてゐる。それは然かも自分の村に起つた事だ。

或家に少し白痴めいた女の子があつた。年は十六か七だと思つてゐる。小學校時代には秀才の部類にはいる方だつたのが、卒業後どうした事か頭が少し變になつて、誰でも白痴となつたと思つてゐた。そしてその女の子のやる事から推して、それに相違なかつたのだ。始めの中、年のまださういかない中は同じ悲しむにしろ度が低かつた親が、……殊に母親の方が、十六七頃になつた時、自分の子か世間並でない白痴である事を非常に悲しみ出した。そして近所の人などにかういつた。

『私は始めはあの子が少しは伶俐な者になつて呉れる事と思つて一生懸命に育てる事を楽しみにしてゐたのですが、あつた者になつてしまふと、

自分はまだ生きてゐたつてつまらない様な気がしてなりませんよ。」
それを聞いて近所の人々は同情せずには居られなかつた。母の心——それは母たる誰にでも解る事であり、感じ合ふ事であるので、出来るだけ慰める事にとどめた。

「お悲しみになるのも尤もですが、然し今に癒らないとも限りませんよ。いえきつと癒ると思ひますよ。現にとても癒らないだらうと思つて心配してゐた〇〇さんなども、いつの間にか癒つてしまつたのですから。」

「そんな事があつて貰へば有難いのですが。實は私は神様にもお願してゐるのですが。」と母親は云つた。

溺れやうとする時は、浮いてゐる葉一本にでも縋りつく。母親はたとへ僅かの事にでも望を托す。「癒らない。」といふ心の反面には「どうして癒らないで貰つていい事か。癒る時があるかも知れない。」と思ふ。事實母親は

かなり癒るであらう事を待つてゐた。

然しその女の子は癒りそうもなかつた。その中に、その子は色情狂的な女になりかけた。その時、母親は只一つの望みが全く断ち切れた事を思つて失望し、自分の生きてゐる理由を失つてしまつた。

その結果如何なる事が起り得たか。それは世にも怖ろしい慘劇である。或日家内の人が皆野良に出て働いてゐる間に、母親は女の子が晝寝をしてゐる上に跨がつて、鎌を持つて女の子の頭を滅多切りにし子供が息が切れたのを見てから自分は小屋の中で縊死してしまつた。

それを知つた人々は驚いて騒ぎ出した。然しその時は遅かつた。一切は終つてゐたのだ。

その後一通の遺書を發見した。それは警官の前で開かれた。それには次の様な事が書かれてあつた。夫に宛てたものだつた。

「私は世にも怖ろしい大罪を犯します。私は自分の腹から生んだ子供を自分の手で殺します。許して下さい。」

私がこの世の中に生きてゐる唯一つの望みは〇〇子が人間らしい、恥かしくないものになつて貰ふ事でした。碌に學問も無い事を悔んでゐる私はどうにかして〇〇子だけでも一人前の者にして、人の前に出て恥しくな

い者にしたかつたのです。その時の喜びだけを待つてゐたのです。毎日々々出来るだけ働くのも皆その爲めでした。

然し一切は終りました。〇〇子の白痴は決して癒らないのです。私が神様にお願したのも無駄でした。

私はこれ以上生きてゐて、〇〇子が白痴者よと云はれて人々の笑ひ者にされ、又叫喚はれるのを見る事は忍びない事です。〇〇子にしろ、生きてゐて恥をかくだけです。否生きてゐればこそ恥をさらさなければならぬ

のです。それと同様に私も、生きてゐればこそ苦しまなければならぬのです。

私は今〇〇子を殺します。それは只〇〇子を助けたいからです。人の前に笑ひ者になつてゐる〇〇子を救ひたいからです。私は〇〇子の母親です。もの。そして私は同時に死にます。〇〇子のない私は生きてゐる必要がありません。子供を殺した親である私は一所に〇〇子と行きます。

怖ろしい罪を犯す事を許して下さい。」

その遺言状は多くは假名で、しかも讀み憎い字で書かれてあつた。

あゝ子の爲めに許り生きてゐる親。それは決して珍らしくない。といふよりは、殆んど全體なのだ。彼等の爲に祈り夜に祈る事は何であるか。それは子供の幸福であるのだ。

その大切な子供達を預つて教育してゐるのは教育者なのだ。教育者は親

の心の延長の上に置かれてゐるのだ。子供等にとつて、教師は第二の父親であり母親である。

美しい殉職訓導松本君の死。それは一切を語つてゐる。彼は父親であり母親であつたのだ。

教育者は慥かに親の心を持たなければならない。が、露骨に、親であり得る喜しさは、實際に経験のあるものでなければ解らない。何十人といふ子供に對して、すべての子供の親である心を持つ難さ、それから苦しさを個性が各々異なる數十人の子を受持つ教師の心。それは第三者には解らない。

教師は自分が親の代理である事を深く感じた時、或距離をとつて子供等の心の前に立つ。然し一人の子がいざといふ時、それは只一人の親になり切る。

一方に於て、教育者は親のなし得ない所までも手を延ばさなければならぬ責務がある。考へれば考へる程、又本氣になればなる程教育者の責任は重い事を感じるだけだ。

松本訓導の死。それは教育者から今迄潜んでゐたものを呼び起さすには居ない大なるヒントである。美しい崇尊な精神がよび起すものは決して些少ではあり得ない。

×月×日

松本訓導の死は遂に世を動かした。あらゆる心に觸れずには居ない力があつたのだ。各新聞は筆を揃へてその美しき死を賞讃し、教育者であり、親であるものは泪ぐんで感謝し一方に興奮した。

或新聞は表彰金を送つて、教育者の精神の権化であるを賞讃した。松本訓導の任地であつた麴町區では數千圓を送り、救はれた兒童の親から一千

圓を送つた。教育關係のある知名の人々は皆松本訓導を表彰する方法を考へ又その崇尊な精神を宣傳した。新聞社を通して弔慰金を送る者の名は毎日々々各新聞に多数に發表された。なほ文部省が奨學金を出してその行爲を賞讃し、靈を慰めやうとした事は特筆すべき一つだ。

松本訓導の死は一個の偉大なる精神の巨壁である。それは人の心を輝し、尊くする。教育者はそれを眼前に見た時内に潜んであるものがはつきりと映じ出される。それから親は自分の可愛い、大切な子供を眼前に感じる。それから子供は自分の爲めには生命迄も捨てゝくれる先生を感じる。扱て、教育者の一人である——と大びらに云ふ事を許して頂く事が出来れば——自分は松本訓導の死によつて、自分の如何なる姿を見なければならなかつたか。

それは燃え切らずにゐる自分に對しての恥しきであり、督勵である。同

時にはほんの僅かとは云へ、その崇尊な精神の一端に連つてゐるのだといふ満足である。

子の親であるあらゆる人々は、松本訓導の死に依つて、未知の大なる者を眼前に見そして感動した。國民新聞を通じて金三十圓を弔慰金として送つた其親達はかう云つてゐる。

『死んだ昇は〇〇小學校の二年生であつたが慈悲心に富み、よく乞食などを櫻木町の別荘の方へ連れ込み、座敷へ上げて食事を與へたやうな事杯もあつた。親として死んだ兒を譽めるのは變な譯だが、本人が生前慈悲心が深かつたので、その遺志に基き本人の冥福を祈る爲め寄附する事にしました。』

此の親達は松本訓導の死によつて、自分の亡兒を再び眼の前に生かした。それは淨化された子供の姿である。そして親の心は涙ぐみながら心の中に

抱きしめた。松本訓導の死は到る所に生命を産みつけ美と愛を與へずには置かない。若し反對にこの親達は誰かゞ子供を虐待した記事でもしたら子供を思ひ出さずに済んだ事だらう。

又或親はかう云つた。

「先生といふものは本當に有りがたいものでございますね。私達は始めてそれを深く感じました。實を云へば私達がそれを感じ無かつたのは、一つは自分の心が足りなかつたのです。私達の心の一方には、手にあまる子供を學校に追ひやつて、先づ安心したといふ氣持ちはあつたのですからね。この様に不眞面目に考へる親も珍らしいと思ひますが、それも案外多いかとも思ひます。本當に恥かしい話ですがそれが本當なのです。かういふ親の子供を教へて下さる先生許りがいゝ迷惑ですね。随つて私達は露骨に云ふと子守のやうな氣がしてゐました。がこんな事が起ると、私達は恥か

しくなる許りです。そして子供に對しても、又先生方に對しても無責任であつた事を本當に濟まなかつたと始めて感じるのですよ。そのくせ自分の子供が叱られて歸つた事を聞いたり等すると、いゝ加減腹を立てるのですかね。いつかすつと前ですが、先生が女の子を夕方遅く迄監禁して、殴打したといふ記事が新聞に出た時、私は先生といふものに對して反感を持つたのでした。然しこんな事が起つてから考へて見ると、それも自分の子供の様に深く考へ、責任を感じて下さるからだといふ事が解りますよ。口ではどんな事でもして悪い事があつたら叱つて下さい。親になり代つて。なごし云つても、何か一寸した事でもあると有難くは思ひませんからね。本當に親の心といふものは勝手なものですよ。だが今度は本當に心を動かされました。あんまり勿體なくなつて來ますからね。たかゞ赤の他人の子供ではありませんか。それを自分の子の様に思つて、生命迄も投げ出され

ると思ふと、涙が出ます。そして一方には自分達が子供を本當に愛してゐなかつた事を感じるのです。私は子供等にも先生の有難い事をよく話してやりました。そして子供が學校でも何か聞いてきました。御悔を差上げたいと云ひましたので、二人の名前で、僅かではありますが新聞社へ頼んで送つて頂く様にしました。』

全くかうした親の心が、この事に依つて幾等よび覺えられた事であらうそれは人の心に光明を覗かしたものだとも云へる。教師の心が親達に通じないでゐるといふ事は全く苦しい事だ。教師と親とが、心を照らし合はなければ、その間に子供は完全に近く健全に育つ事が出来ないのに。

然しそれは決して親だけの罪では無い。自分達、教師にもかなりの責がある。

親と教師との繋がりである子供に對して、教師は常に誠なものであり得

るか。恥しいが自分にはあり得ない事を悲しむ。教師の心が子供に暖く全的に働らくなれば、子供は教師と親との心をつ結びつけずには置かない。然し親の心を冷やかして終ひ、學校に對して又子供に對してさへ或冷淡さを親の心に與へて了ふのは、自分等の明らかな罪だ。

自分のよく遊びに行く家の或女の子の母親は曾つて次の様な事を自分に云つた事がある。尤も教師としての自分を頭へ入れて云つてゐない事は明らかだ。只親しい知人として、遠慮なく感想を話した言葉なのだ。

『男の子を持つ親達に比べて、女の子の親達が餘計に心配しなければならん事が多いと思ひますよ。』そういふ前提を持つて話し出されたのだつた。

『私は貴方も御存じの通り六年に通つてゐる女の子の親ですが、ごうも苦勞が多いんですよ。一般にさつきも申した様に、たしかに男の子を持つたよりは、女の子を持つた方が世話がやけるに違ひないんですがね。』

一體今の學校は少し不真面だと思ふ所もあるんですがね。殊に五六年頃の女の子を持つて下さる事はもう少し考へて頂きたいと思ふんですよ。何だかあんまり失禮な事を申し上げる様ですがね。

それといふのはこんな事があつたから申し上げるんですよ。

此の間學校で受持ちの先生から叱られたと云つて家の子が泣いて歸つたんです。尤も家の子許りでは無く他にたくさんあつたと申しますがね。その事實を申し上げるのはよしますが、兎に角かなり叱られ、そして少しでせうが打たれたりもしたらしいのです。

私は自分の子を棚に上げて置いて云ふのではありませんが、どうも先生の心に解らぬ所があると思ふんですよ。六年頃の女の子の心理状態を一體その先生は知らない。と私は思ひますよ。ねそうでせう。十三四の子供を泣かせ、又おまけに打つたりするといふ事は餘程考へもんだと私は思ふの

ですよ。いくら男の先生でも真面目でさへあればあの頃の子供はどうすればいいかを少しは考へて下さる筈だと思ひますがね。

私の所の子供はその翌の日は學校へ行かない。と云つて容易に云ふ事を聞かないんですよ。が私は色々話して兎に角學校へは上げたんですがね。然し子供の心が解つてゐる心には叱る様にして學校へやるのも苦しかつたんですよ。叱られて泣いて歸つてから、黙つて沈んで何か考へてゐるのを見てゐた私は、かはいそうでなりませんでした。

先生には随分色々ありますのね。本當に子供の事を考へてやつて下さる方もあれば、又いゝ加減にして誤魔化して何の研究もして下さらぬ方もありますのね。子供の心持ちが本當に解つて下さる方に教へて頂きたいものだと思ひますよ。あの頃の子供はよほど考へて頂かなければならないんですからね。あんまりちやほやして頂くのもいやですが、その

様にして貰ふのもあんまり情ない氣が致しましてね。」
自分はこれを聞きながら、眞剣で話してゐる母親の顔を時々ちらちらと眺めて、何となく恥しい様な氣がしたのだつた。

『なる程教育者の生活は少し低すぎる。もつとくどうかしなければ親の頭が次第々々に進んで行くのと歩調を一つにして、そして満足を與へる事が出来まい。何しろ自分自身が第一恥し過ぎる。』と思つたのだつた。

親は教師の本氣さに動かされた時、本當に子供を教師に委せる氣になり安心をする。同時に自分の子に對して、教師の心を生かす親であり得る。自分達の反省しなければならぬ事は至る所にごろ／＼してゐる。松本訓導は親達の純潔な感情を喚び起してくれた。それを生かして行くのは教育に當つてゐる教師それ自身だ。自分達自身なのだ。なほ松本訓導の美しい死をよび起したものは、親の中に隠れてゐる親だけでは無い。(少し變な語

だが)隠れた、忘れられた義なのだ。勞働をしてゐる人々が續々と弔文を添へて弔慰金を送つたのを見ても分る。(勿論その中には、親としての感情も含まれてゐる事とは思ふが)金額は些少ではあるが、筋肉をしばつた淨財です。どうぞ御靈前に御供へ下さる様に』と云つて送られた。

要するに松本訓導の死は、あらゆるひそんでゐる人間の心に對しての強い暗示である。それをうまく行かして行くのは主として教育者の力だ。自分は反省しなければならぬ多くの事がある。教育者はこの時に當つて、松本訓導の精神を生かして行く事が出来なければ恥である。そして松本訓導に對して恥を與へる事になる。

すべてはこれからだ。松本訓導の死は一種の悲壯なプロバカンダである。
×月×日
教育者は子供の生活を中心として爲されなければならぬ事は判り切つた

小學教師の手記

事だ。教育の進歩とは何を云ふか。即ち子供の世界の伸展である。

この判り切つた事が、今の教育界で、何の點迄正しく行つてゐるかは頗る疑問だ。教育の理論は進歩する。そして子供等に大切な施設はどしどし増される。然し肝腎の子供の生活はどの點迄展けてゐるか。目に見える形式上の結果が、決して本當の教育の進歩を語るものではない。

或學校では、單にその學校の名を擧げる爲めに、體操器具やその他の設備をした。果して人の注意をひく様になつた。がそれだけでいゝのかどうかは頗る考へる必要のある事だ。

その學校の校長は或時次の様に職員に訓示した。

『諸君は皆で協力して學校を名高くしなければならぬ。學校を名高くするといふ事は、即ち校長を名高くする事だ。これは校長を偉く見せる様にする事だ。』そして小聲で附け加へた。『諸君は校長に對しては絶対に服従し

てゐる様に見せ、禮儀などをしつかり守つて、その中に本當の尊敬の心をこめて貰ひたい。』

これが白晝行はれる教育者、而かも校長の語だ。

自分は暗然たらざるを得ない。『子供は啜り泣いてゐるのだ。』と絶叫したくなる。校長や職員の爲めの學校では無いのだ。子供の爲めの學校では無いか。それから子供の美しい世界を追ひ拂つて、人間の心のさもしい暗鬼を育て、行くといふのは情ない事だ。恐ろしい冒瀆だ。

かうした背景の前に、教育の悲劇は行はれる。以上に必ずしも概當するさは云へないかも知れないが。

自分はNといふ少年の生活を中心とした物語を遠慮なしに書きつけて置く。それは明らかに現今の教育が生んだ一の悲劇である。

Nは父が亡かつた。彼がまだ五つの時に、急性の或流行病の爲めに死ん

でしまつた。後には母が一人と、お爺さんとお婆さんだけだつた。そのお爺さんお婆さんはもう働く事が出来ぬ年齢である。

従つて一家の家計を維持する者は、Nの母だけだ。Nはまだ小學校の五年に通つてゐる少年であるのだ。

母には數限りない苦痛が、次から次へと重くなつて行く計りだつた。何を云ふにも、今の急迫してゐる生活不安の時、難を切り抜けるといふ事は女の手一つでは難儀な事である。その子供一人を育て、行くだけでも、もう彼女には重過ぎる負擔であるのだ。それに母にはまだ兩親があるので、それも養つて行かなければならないのだ。彼女は氣が氣でないのだ。どうして翌の日の米代を得るかといふ事は、朝から晩迄、彼女の頭に擱みついて離れない問題である。而かも彼女はそれを決して忘れる事が出来ないのだ。恐ろしい現實は口を開いて待つてゐるのだ。彼女は若し心が無かつたら恐

らくもう此の生活からとくの昔に去つて終つてゐた事であらう。

然し彼女にはNがある。彼女にとつてNはすべてである。Nなしに彼女は苦痛に堪えて行く事が出来ない事であり無意味なのである。露骨に云へば、彼女は兩親の爲めに生きてゐるのでは無い。皆Nの爲めなのだ。而かも、彼女には思ひ切つて子供の事だけを考へてゐるといふ事を現す事が出来なかつたのだ。それは他でも無い。彼女はその兩親にとつては嫁といふ關係なのだ。彼女が二十歳で嫁ぎ、三十五の今日迄十五年の間、同じ家に住み乍ら矢張り彼女にとつて兩親は姑であり舅である。感情を挿ますには居られなかつたのだ。夫が死んでから思ひ切つて家を出て、故郷の生家に歸らうと思つたのであつたが、彼女にはやつぱりNがあつたのだ。

そうした關係から、彼女は親に少し不義理な事をして、満足に人並に明るく育て、やりたい希望が胸一杯に燃えてゐながら、やつぱりそれが出

来なかつた。

彼女は毎日朝早くから夜遅く迄、他人の賃仕事を請合つてこしらへた。それが彼女の一家を支へて行くすべての費用であるのだ。然し一時はそれで間に合つてゐても、とても今日となつてはそれが間に合はなかつた。母が一生懸命に苦しみながら働いてゐる事が、子供とはいへNの目に映らずに居なかつた。

「私も何かお手傳しませう。」とNは母の顔色を覗ひながら落ちつかぬ目をして云つた。

「まあお前は勉強しておいで、その中たのむかも知れないからね。」

彼女はそう答へた。そして彼女は親の方を見た時、冷たい眼をして自分達親子を見つめてゐる目を感じた。彼女にはどうしても冷たい目としか思はれなかつた。彼女の胸の中には呪とも云ふべきものが時々揺れた。彼女

はそれをいつと抑へながら自分を勵まし、いましめた。

Nは時々夕方などは夕飯の仕度の手傳をした。勿論掃除なんかは、いつの間にか彼一人の役目となつて了つた。彼はそれに安んじ、且つ満足してゐた。「少しでもお母さんの手傳をする」といふ事が彼を元氣づけた。

かうした彼は學校では優等生の一人であつた。毎年々々、御褒美を頂く例になつてゐた。

或日Nは遂遅刻してしまつた。朝の掃除のため遂おくれしてしまつたのだつた。

「どうしたのです。」

教室の扉を静かに明けてはいつたNを見て教師は云つた。彼は黙つて下を向いた。その中に或子供が高々と云つた。

「Nさんは家で朝お掃除したりして働いてゐるのです。」

小學教師の手記

彼はふとその子供の顔を見た。それはすぐ近所の子供であつた。彼は黙つて又下を向いてしまつた。彼には非常な恥を受けた様な感じが強くした。

『あゝそうですか。』教師はそう云つたきり彼を机に行く様に指さした。

彼はお辭儀をしてから机に行つた。人がもう本を勉強してゐる中で、自分だけが机のふたを開閉する音を氣にしながら本をとり出したのだつた。

この日の事が、非常に簡單な事である様であり乍ら、どうしたものか長い間忘れる事が出来なかつた。他の子供が云つたその話、それを思ひ出した時、彼は泪ぐんだ。同時に何かいひくゞと胸の中におき上つて來るのを感じた。

『自分もあの人達の様に暮す事が出来たら。が自分はあんな人達に負けな様に勉強しやう。そして偉い者にならう。お母さんを喜ばせやう。』

彼は生活状態から來たのではあるが、他の子供の感じない事も感じる性質があつた。それを近邊ではませてゐるさいつてゐた。

勿論彼は自分が學校で感じた苦しい事などを母に知らせる様な子供では無かつた。人より無口な彼はそんな事に對しては殊に黙つてゐた。さすがに母はそれを感じてゐた。それで時々『學校は面白いかい。皆が仲好くしてくれるか。』等と聞いたが、彼はその度に『面白い、皆と面白く遊んでゐる』と答へた。母はそれを聞いて幾分ほつとした喜びを感じながらも一方では強くNの云ふ事を否定してゐた。そしてあべこべに、そう云はなければならぬNの心を考へて苦しんだ。彼女は現在の學校が、決して平等に子供の事を考へて呉れぬ事を知つてゐる。有力者とか云ふものゝ子供はわりに優待され、頭がよくなく、成績がよくなくつても、通信簿には甲といふ點が多くつけられるといふ事を知つてゐた。父兄會かなんかの時、子供が

どうしてゐるか様子を聞きたいと思つて無理に仕事を休んで學校へ行つても、彼女は常に悲しさを與へられるだけだつた。有力者とかいふ、装のいい人達が校長等とも遇つて話し合ひ笑ひ合つてゐても、一般の人々はその様な満足も、歡待も、されなかつた。殊に人並はずれて無力者である彼女はひがみから許りでもそれを感じた。そして失望してすごとくと歸るのだつた。

この苦しい母の心の全部を知る事が出来なかつたNは、時々、何もかも忘れて、友達と夕方迄笑ひ合つて遊び暮す事が珍らしくなかつた。そして又それが母にとつても満足な事であつた。自分の子供が人並に待遇されてゐるいふ事を知るのが喜びであつたのだ。

或時Nは學校から歸つて来て母にかう云ふ事を知らした。

「今日ね。Aさんが怪我したんですよ。梯子からおつこちたの。そしたら

ね。先生方が皆あつまつて行つて職員室へかつぎ込んだのよ。それから間もなく傳が来てAさんがそれに乗せられたんですよ。そして校長さんや他の先生やがついて送つて行つたのよ。皆がそれを見てAさんはいしなあと云つたので、先生にひどく叱られたんだよ。」

母はこれ聞いて苦しくなつた。

「あゝそうかい。先生といふものは親切なものね。」彼女は強いてそう云つて見たが心が次第に反抗し燃え上る事を意識した。

「いや、先生は皆にそんな事をしないのだよ。それは皆んなも云つて居たよ。あの人達だけになんだよ。」

そう云つたNの言葉は素直だつた。何も含んでゐない様に聞えた。然し聞く人はそうはいかなかつた。

「これから學校へ子供をやるまいか。」と彼女は思ふ程、腹立たしく、又情

なくなつた。

「まあお前だけは怪我をしては不可ないよ、遊ぶ時もよつく氣をつけてお遊びね。お母さんが心配してゐるのだからね。」

『うん。』Nはそう答へたゞけだつた。

彼女はその時去年の學藝會の時の事を必然的に思ひ出した。

五六人で對話をする時、Nは下男にされた事を思ひ出した。その時Aは良家の少年になつたのだつた。

これは彼女が、「こんな事は何でも無い事だから氣にかけまい。全く何も無い事だ。」と思はうとし、そして又いつの間にか、忘れ切つてゐる事であつた。然し彼女は今又それを思ひ出した。そして強い侮辱を感じさせられたのだつた。

「何故何にも無い子供迄が、此の世の中での取扱を受けなければなら

ないのか。」そう思ふと矢も楯もたまらなくなるのだつた。

「何故自分の子供を奪ひ去るものがあるのだらう。Nは自分の生命だ。」

全く子供は此の世以外の者に違ひない。彼等は自然そのものゝ姿だ。それを汚すものは大人の汚れた神經では無いか。そして又此の世の中では無いか。子供は一樣に尊い。子供は子供での一個の立派な存在であり、生活である。何等背景を要しない。親の持つ名譽、權威。子供はその爲めに償値づけはされない。若し背景があるとすれば、普遍的『親』であるのだ。親は不必要なものであつても、子供はその爲めに何等犯されてゐはしないでは無いか。

然し現在如何にこの有り得べからざる事が白晝。然と行はれてゐる事であらう。それは子供といふ教育の唯一の對象はその中心から除外されてゐるために他ならない。

扱てその不幸の親子の上に、更に大きな不幸が襲ひかゝる時が来た。といふのは彼女はとても生活を支持する事が出来ない時が来たのだつた。

『本當に云ひ憎ひすまない事だが、一つお願ひがあるが、聞いてくれるかね。』

母は打ち沈んだ調子で、親達が寝てしまつてから彼にかういつた。

彼は不安に胸をさわがせながら、母の顔を見つめた。そして云つた。

『えいお聞きします。お母さんの仰言る事には。』

『こんな事を云ふのはお母さんとして苦しい事だが、もう私達は暮す事が出来なくなつたのだ。今だから云ふが今迄お前が學校で使ふ色々な物の金を出すのが、私には本當につらい事だつたんだ。お前が家に居らないからわかるまいが、お母さんはいつてもお晝飯の時はお粥を食べてゐたのだ。』

『おいもが半分はいつたね。そしてお爺さんとお婆さんだけに御飯をあげてゐたのだよ。けち臭いとお爺さんが云ふ事があつたが、そんな事では無いのだからね。』

今勉強最中のお前に勉強をやめさせるのが本當にすまない事だが、お願ひだから一寸の間學校をよして他へ行つて働いてくれまいか、といふのは新聞社の給仕なのだ。この苦しい事情を話したら或人が世話して下さつたのだ。その人は、「新聞社なら他の所と違つて只働くだけの事では無いから時には新聞を読んだりなんが出来るから幾分かいいだらう」といつてくれたのだ。

本當にすまないがね。その間お母さんは一生懸命になつて働いてお錢をとつて貯へますよ。それからお前も自分一人で食つては少し餘る位お錢を呉れるといふ事だから、お前も出来るだけ節約してためてね。そして一日

も早く、又學校へ行つて勉強が出来る様にしませうね。尤も新聞社へは朝早く出て行けばいいのだし、夕方は少しは遅いが、歸つて來られるのだから今迄と別に變つた事はないのだよ。たゞお前が學校へ行つて勉強が出来ないだけの事だよ。

本當にすまないがね。當分お母さんの心を考へて働いておくれね。たのむよ。」

彼女はそう云つて泣いてしまつた。

「何といふ役に立たない親だらう。自分の子供を育てる事が出来ないとは何といふ情ない事だらう。こんな腑甲斐ない親は又とあるだらうか。がNは忍んでくれ。お前の爲めに許り生きてゐる母のだよ。」

そう母は心の中で言ひながら。

Nは母の言葉を聞いて泣き伏してしまつた。親と子が抱き會つて、暫く

の間は何も云ひ得なかつた。

「新聞社へやつて下さい。」暫くしてNは泣き乍ら云つた。

「あゝ行つてくれるかえ。本當にすまないね。」

母はNの肩に手をかけた。

「ね。これも當分の間だからね。その中又學校へ上げるからね。」と母は云つた。

かくてNはその翌日から某新聞社の給仕になつた。そして彼は朝は早くから夕方は遅く電燈が灯る頃迄、新聞社の中を色々と駆け歩いて人々の用足しをした。

「おい先生がどうして學校へ來ないのかつて云つてゐるよ。」或夕方そう云つて肩をたたく子供があつた。それは友人のSであつた。「もう少したつたら又でるよ。」彼はたゞそれだけ行つて遁る様にして先へ歩いた。

『知つてるよ。』先の子供は後からあびせかける様にそう云つた。彼は家へ歸つてからは寢る前に必ず學校の本を出して讀んだ。知らない字があるとそれを寫して行つて新聞社へ行つてから人々に聞いた。

その中に彼は新聞社になれて來るに従つてむしろ學校よりも一層の親しさを感じ出した。縦令給仕にしる、記者は別に馬鹿にするでもなく知つてゐる事は何でも教へてくれた。或日彼は家へ歸つてから母にかう云つた。

『今日ね。Tさん(新聞記者の名前)がこんな事を云つたよ。お前は又學校へ行くのか。それはよせ。今の先生はお前達などを相手にしてはくれないからつてね。どうしてと聞いたら、『だつてそうぢやないか。』つて云ふんだよ。だから僕が『勉強したいから又行くんだ。』と云つたら、『そんなら俺がいく人を教へてやる』といふんだよ。』たれです。』と聞いたらBといふ人だといふんですよ。どうしていふ人ですか。と聞いたらね、いふ事を教へ

てくれたんだよ。』Nはそう云つて笑つたそれは淋しい母をつり込ますには居られない程晴々したものだつた。

『Bといふ人はもとは學校の先生をした人だつてね。そしてその人が學校をいやになつてよしてしまつてから、夜だけ近所の子供を集めて教へてゐんだつて。そしてお錢は一文もとらないんですよ。その人に教へられると學校なんかへ行つて勉強するよりすつといふから行きなさい。といつてくれたのよ。そして手紙を書いてくれたよ。』そう云つて懐から手紙を出した。それはTからB氏に宛てたものだつた。

『では何かね。晝はやつぱり新聞社へ行つて、夜だけBさんへ行つて勉強するのかね。』

母は少し不安そうに云つた。

『え、そうですね。そうすれば随分都合がいふんでせう。』彼は愉快そうに

笑つた。

『そしてねTさんは、一晩だけお母さんに連れて行つて頂けとおつしやつたよ。ねお母さん。今晚これから行つてくれない？』

母には何が何だか解らなかつた。あんまり都合がよすぎるので、却つてへんな氣がしたのだつた。

『そうね。』そう云つて母は考へ込んだ。

『さあ早くさ。』Nは急ぎ立てた。

『本當に行つてもいいのかわらぬ。なんだか偽の様だね。』母はまだ立ちかねた。

その晩、Nはお母さんに連れられて、かなり遠いBさんの所迄歩いて行つた。

母は何だか夢の様な氣がしてならなかつた。そして向ふへ行つて失望す

る様な事がなければいゝがと願ひながら歩いた。

B氏の家は小さな家だつた。長屋ではなかつたが小さな見すばらしい家だつた。あたりを何遍か廻つた末、漸く見つけた極不明瞭な家だつた。

中には子供の聲がした。母の胸は躍つた。そして本當であつた事を感謝した。

その晩彼女はB氏から次の様な言葉を聞いた。Bといふ人はまだ若い三十位な獨身な人で、自炊をしてゐたのだつた。

『私はもと小学校の先生をした事があるんですが、正直に云ふと私は温和しく教育界にある事が出来なかつたのです。子供が中心になるべき教育の筈なのに、子供はそち退けにされてゐたのですからね。学校の校舎は子供等を大切に包む爲めに出来た筈なのですのに、あべこべに、學校といふ建物の中に閉ぢこめられて生活の材料方便となつてゐるのですからね。私は

とてもたまらなかつたのです。自分が本當に子供の爲めだと信じて何もかも排してやらうとすれば校長に邪魔されて出来なかつたのです。私は校長の爲めに教育してゐるのでは無くて、子供の爲めに教育してゐるといふ自覺があつたので、勢、校長の考へとはかなり違つた事をやらうとしたのです。がいくら子供の爲めになつても、社會の人々の心にへつらひ、歡心を買ひ、當局の眼を喜ばせ、或一部の、つまり有力者といふ校長等から見れば非常に重要な人達を喜ばせる様な事では許されなかつたのですからね。自分の地位を保つ爲めには、子供を投げすてしも、當局者或は有力者にへつらふといふ事は私にはとても出来ない放れ業なんですからよ。全然立場が違ふんですからね。教育者の或者は、有力者の子供の爲めには、全校の子供の授業に差支へる様な事でも平氣でしますからね。私は、不意轉任の辭命を受取つた時、遂に退職する事に決心してしまつ

たのです。そして自分は自分の信する所をやる事に決心したので。幸、一部の人は私の心を知つて同情し力づけてくれますので私は元氣です。が晝は食ふ爲めに働かなければならないので、夜だけ子供達を集めて教へてゐます。晝の學校へ行く事が出来ぬ子供が多いんですが、二人許り、そうでない子供も預つてゐます。學校にはいゝ加減に轉任したか何かにしてゐるといふ事です。それは篤志な人の子供さんです。私は少しでも私を信じて子供を頼んでくれる人がある事を喜んでゐます。家が狭ひので充分な事が出来ませんが、それでも今の所間に合ひます。

私は出来るだけの事をして、小學校で覺える位の事はもつと僅かの年限でやつてしまふ事が出来ると思つてゐます。そしてわりにしつかりした人を作りたく思つてゐます。それが出来れば何より私の幸福です。

貴女のお子さんにはNさんでしたね。必ず一人前の者にして上げる様骨を

折ります。何しろかけがへのないお子さん方ですからね。かなり大きな迄お世話致したいと思ひます。いつ迄かつても、私が手をかけた責任は持ちますから。どうぞ御安心下さいませ。」
母はそれを聞いて涙を流して喜んだ。終の言葉だけで彼女には充分であつたのだ。

それからNは毎晩B氏の所へ行つて勉強した。お友達は十人足らずであつた、が皆兄弟の様に親しみ合ひ助け合つて勉強した。

彼はお父さんの様にBを思つた。お父さん。それは彼が生れてからまだ一度も感じた事の無い事であつた。母も満足した。本當に助かつた様な思ひがした。彼等は始めて幸福さを感じたと云つても嘘では無い。

この位にして自分は物語をやめる。

只Nは現在思想界の中に新進として知られ將來を囑望されてゐる事だけ

を附け加へて置く。

實を云へばこの物語はその人が書いた自叙傳の所々を借りたものである。それに自分が直接その人から聞いた事も加へてはゐるのだが。

この事實が教育界の一面を語るものであり、同時に悲劇と云ひ得る事である事を自分は信じてゐる。

子供を中心にして教育、その徹底が何より必要であり、急務では無いが、この點を自分は反省すると同時に、人々も考へなければならぬ事だと思ふ。



小學教師の手記

終

大正九年十月三日印刷
大正九年十月十日發行

著者 吉田助治
發行者 松野鶴平
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
隆文館株式會社代表者

小學教師の手記

不許
復製

定價 金貳圓

印刷者 川崎佐吉
印刷所 川崎活版所
東京市京橋區築地二丁目三十番地

發兌元 隆文館株式會社
東京市京橋區南鍋町一丁目
振替口座東京八五三番

回自學獎勵會編

家庭教育百話

四六判三百頁
總洋布裝美本
定價金貳圓
送料金拾貳錢

【刊新最】編者曰く、「子女をして義務教育を受けしむるは元より父兄の責務ではあるが、單に受けしめたといふだけでは、決して父兄の責務は除かれぬ。學校教育の効果を十分ならしむるやう、家庭に於ける子女の取扱に留意するは勿論、より進んで其天分を啓かしめ、國民として、社會の一員として、ゆくゆく立派に行動せしむる用が肝要である」と、かくて本書は家庭に於ける子女教育に關するあらゆる問題を遺憾なく解決せしむべく、教育百話の事項を網羅解決せる家庭に於ける子女教育の最良の指導者最高の顧問である。

回自學獎勵會編

學校教育百話

四六判三百頁
總洋布裝美本
定價金貳圓
送料金拾貳錢

【刊新最】澎湃たる現代思潮は教育界にも改造、新機運を醸成した。吾等は、最大理想の實現によつて、健全有爲なる第二國民の養成を、寸時も忽せにすることは出来ぬ。是れ、眞に現下の急務である。凡して百話の事、苟も之を改造せんと欲せば先づ其の根基を教育に求めなければならぬ。教育の改造なくして眞の改造は行はれやうか。本書は即ちこの「地」から、現代教育界に於ける諸大家が示められたその名論卓然數十篇を蒐録したるもの。記述平明、何人にも解し易く、世の教授者諸賢に取つては絶好の参考書である。

回自學獎勵會編纂

【最新刊】

家庭に於ける兒童の教養

四六判二頁五十四頁
總洋布裝美本
定價金貳圓
送料金拾貳錢

子供の家庭内に於ける教養は父兄及家族が實際に子供の生活を知らねばならん、そして將來の希望に添うて、立派な子供に仕立てるには常に學校任せの教育のみではいけない。餘程之には細心の注意が入り家庭内の感化教養と云ふものが必要です。故に本書は是等方面の知識と經驗に富める各實際家に求めて諸有諸問に添はしめ、家庭教養の模範を詳しく示してあります。心ある家庭の必讀をお薦めする。

回自學獎勵會編纂

【最新刊】

學校に於ける兒童の教養

四六判約二百五十頁
總洋布裝美本
定價金貳圓
送料金拾貳錢

歐洲戦後の經營は各國共に兒童問題を中心とし、何れも新國民の養成に努力するのである。今や學校教師は單なる學校管理の形式主義の教育に止まるべきではなからう。兒童の身軀と精神と品性の可能性を最も完全に發揮し得る生きた教育を施すにあるので、本書は各教育専門諸大家の所説を列挙し、學校に於ける兒童教養の眞の意義を明にした。世の教育家諸賢の一讀をお薦めする。

抄録目書圖館文隆

文學士 青木武助君 共著 學習院助教 宮榮春君 共著	小學校歴史教授 <small>の教材 の研究</small>	金四圓 貳拾錢
角田 政治君 共著 中野 八十八君 共著	小學校地理教授の實際	送料拾圓 五拾錢
農學士 成田軍平君 共著 奥井 平七君 共著	小學校農業教授の實際	送料拾圓 五拾錢
奥井 平七君 著	小學校農業科新教授細目 <small>補習學校</small>	送料拾圓 五拾錢
三浦 關造君 著	小學教師としてのトルストイ	送料拾圓 貳拾錢
文學士 淺山尙君 著	綴方教授の破壊と建設	送料拾圓 五拾錢
大川 義行君 著	初學生兒童訓練法 <small>と假名教 授真髓</small>	送料拾圓 貳拾錢
東京高師教授 樋口 長市君 著	愛兒の躰けと愛兒の教育	送料拾圓 八拾錢
樋口 長市君 著	女教師の爲に	送料拾圓 六拾錢

教授參考書

抄録目書圖館文隆

四山 哲治君 著	自學各科教授原論	送料拾圓 五拾錢
東京府立一高女學校長 市川 源三君 著	乳兒の教育	送料拾圓 五拾錢
三浦 關造君 著	教育工ミール	送料拾圓 八拾錢
三浦 關造君 著	教育文學十講	送料拾圓 貳拾錢
自學獎勵會編	自學主義の教育	送料拾圓 八拾錢
足立 栗園君 著	社會德育及教化の研究	送料拾圓 五拾錢
阪田 潤藏君 共著 時 木 要君 共著	實驗的算術教授法	送料拾圓 貳拾錢
ウエルズ 原著 三浦 關造君 譯	新エミール	送料拾圓 八拾錢
農業振興會編	通俗模範講話集	送料拾圓 參拾錢
服部 北溟君 著	遺傳から見た小供の性質	送料拾圓 貳拾錢

抄録目書圖館文隆

自學獎勵會編	家庭教育百話	送金料八貳錢圓
同	學校教育百話	送金料八錢圓
同	尋常第六年地理歴史理科自學の栞	各冊送金料六拾錢
普通教育研究會編	受驗用自習用教師用基本算術書	送金壹圓貳拾錢
宮部治郎吉君著	家庭學校算術の教へ方	送金料六拾錢
同	尋常第二家庭學校算術の教へ方	送金料六拾錢
橋本留喜君著	中學學校入學準備國語自習書	送金料八拾錢
井田靜夫君著	家庭教師としての母の讀本	送金料貳拾錢圓
小田律君著	英語力の養成	送金壹圓八拾錢